
Rewrite † song †

のりまき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Rewrite + song +

【Nコード】

N1901V

【作者名】

のりまき

【あらすじ】

趣味は漫画読破と狙撃――

そんな一人の女の子として、朱鷺戸沙耶がもしRewriteの世界に存在していたら？

「笑いなさいよ、あーはっはっはっはって！――これはオカルト研究会で繰り広げられる、起こりえたかもしれない1つの『枝』の物語。」

これは、Rewriteとリトルバスターズのクロス物です。Rewrite原作に沿って書いています。そのため片方、もしくは

双方がプレイ済みで無い場合でも話は分かるようになっていきます。
ただし、ネタバレにはご注意ください。

memory——出会い

「何だよこれ……くそっ」

酷い有様。家だと思われる建物はほとんど崩れ、瓦礫の山になっている。その瓦礫の下に見えるのは、無残な人の死体。こんな状況を、回りの奴らは「直慣れる」と言ってるが、俺はそんな事は無いと思う。これは、いつどんな時に見ても酷い。逆に、それが現実。皮肉だ。こんな状況だと、食い物があつて、水がいくらでも出て、それであつて安全な街。そんな環境でぬくぬくと過ごしてた自分が馬鹿らしくなる。

「おい！ 誰がいるか！」

まだかるうじで原型を保っている建物。その中の潜り込み、声を張り上げる。足元には、右手を伸ばしている人の死体。これは……大人の男だろうか。この人にも子供とかいたのかも……。

駄目だ、考えちゃいけない。考えると忘れられなくなる。駄目だ、忘れよう。

「……っ」

声。かすかに今、確かに聞こえた。生存者か？ どこだ、どこに
いるんだ？

瓦礫の山をかき分ける。一つ、また一つ。俺の体と同じくらい大きい瓦礫もあるが、別に重くはない。プラスチックを持っているように、軽々と持ち上げられる。

「んっ……」

瓦礫と瓦礫の間に出来た狭い空間に、一人発見する。生存者だ。
そしてこれは……女の子？

黄色い長い髪に、白いリボンをしている特徴的なツール。そしてエメラルドの綺麗な瞳。多分、年下。

「だ、大丈夫か！？」

「……動くな」

「！？」

気付いた時には、彼女の手には生々しく銀色に光る銃。そして、銃口は俺に向けられていた。

銃を向けられるという行為は、ここでは遊びでは無い。日本だったら少女が銃を持っていた所で、エアガンと思われるだろう。だが、ここは違う。ここでは男も女も、子供も老人も、銃で人を殺し、殺される。それだけが紛れもない現実で、平和なんて言葉とは程遠い。

だから、銃を向けられたら、その向けている人間は——敵。そういう事だ。

「大丈夫。俺は助けに來ただけだ」

「うそ……嘘よ。お前が……ここを襲って。そして……殺した！」

まっすぐな瞳。はっきりとした敵意と、そして殺意。でも、体は震えている。当たり前だ。彼女の目に映る俺は殺人者で、銃を下ろした瞬間に襲いかかってくるような人間。いや、もう人としてすら映っていないのかもしれない。

「うつ……」

「お、おい！ 怪我してんじゃないか」

頭から血が流れ出ていた。それも、かなりの量。それに、足もかなり酷い。このままでは、出血多量で危険な状況にもなりえる。早急に処置しないと……

「血が出てる。このままじゃマズイ」

手を差し伸べて、一步近づく。ゆっくりと。でも、彼女は銃を下ろさない。やはり彼女からみれば敵なのだ、俺は。

「このままじゃ死んじまうぞ？」

「黙れ！ 動くな！ これ以上近づいたら……っ！」

でも、俺は近づく。彼女を助けたい。別に英雄になろうってんじやない。死にそんな人全員は救えない。むしろ、俺は殺す事さえ強いられる。

ある時、魔物使いの子供を殺した。気付かなかった、なんてのは所詮言い訳だ。そう、俺はこの手で殺した。何人も。気付いた時には遅かった。ライフで額を打ち抜き、心臓を焼き、そして心を砕いた。だが、そんな事をするのにもいつのまにか抵抗が無くなっている、というのも現実。殺すという行為に抵抗感が無くなってゆく最低だ。俺は結局、ただ人殺しなんだ。

俺は、彼女を助ける資格すらないのかもしれない。銃を向けている、だったら殺してしまえばいい。簡単だ。肩にかけているライフを構え、彼女の額に銃口を向けて引き金を引くだけ。そうすれば銃声と共に薬莢が地面にカランと落ち、目の前の女の子の命はそこで尽きるだろう。

でも、助けたい。ただのお節介だ。でもそれが、俺の生き方なのかもしれない。

一步、また一步。徐々に彼女との距離を詰める。彼女の振るえる手で、銃口が向けられている。でも、そんなの関係無い。俺の目の前にいるのは敵じゃない。ただの怪我をした、1人の女の子だ。

助けたい……助けたいんだ。

「く……くるな。来るああア！」
「ぐっ……」

銃声。

瓦礫の世界で、一つの銃弾がその音と共に直線の軌道を描く。それは、俺の体をいとも簡単に突き抜ける。脇腹に辺りが熱い。でも、体は痛くは無い。心が痛い。彼女に銃を撃たせたのは、俺自身という存在だ。そんな彼女にしてしまった事が痛い。俺なんてどうでもいい。だが、彼女は助けなきゃいけない。

「な、何でよ……。何で来るのよっ！」

二発目、そして三発目の音が響く。二発目は後ろの瓦礫を崩し、三発目は俺の左手を打ち抜く。血が流れ出る。でも足は動く。歩を止めない。そして、最後の一步を踏み出し、彼女に辿りつく。

「何で、何で私を殺さないの……？」

俺は、涙を流す彼女を抱きかかえる。重かった。人の重み。さっきの瓦礫とは違う、手にかかる重さ。生きている証拠の鼓動を感じる。

「俺は……お節介なんだよ」

それが、俺の中身のない人生を生きる上での、唯一の柱だから。
だから俺はきつと、こうしてお節介をしつづけてる。きつとこれから、し続けるんだろう。

「うつうつ……。うわああああああん!!」

彼女は俺に担がれながら、叫ぶように泣き続けた。
……涙が枯れるまで、延々と。

10月3日——森の搜索

夜の森。入口から30分は歩いたか。

「さて……」

広い森……

住宅地に近いためか、動物や虫をほとんど見ない。人間を警戒して、奥に逃げてしまっているのか。

土地の子供にとっても森は良い遊び場だ。

そつえば……子供の頃、カブトムシを取ろうと森に入った事がある。夏休み中ずつとねばったが、一匹も見つける事はできなかった。だから俺は、本物のカブトムシというものを知らない。

いつしか、森で遊ぶことはなくなった。気付いたのだ。森には動物もいないし虫もない。

まるで空っぽの世界みたいで、退屈に思えた。

「……手を上げて」

「っ!？」

一人で昔の事を懐かしみながら歩いていると、後頭部に冷たい金属物が接着する。ゴツリと森に不似合いな、不快な音。それと同時に聞こえる、冷たいが、とても聞きなれた声。

「何故ここにいる？ 答えないなら殺すわよ」

唐突すぎる。何故いきなり死ななくてはいかないのだ。そもそも、お前も何でここにいるんだ？ と質問したいくらいだ。

勿論、反論する。

「いや、意味分かんないから」

「それは答えになっていないわ。で、何でいるのよ」

「えーとだな。俺は今、クエストを仰せつかってるんだ」

「どんなよ？」

「か弱い迷える小鳥を探す。これやらないと、ダンジョン脱出フラグが立たないのよ」

「ふーん」

すると、後頭部の感触が無くなる。安全になったと確認して振り向くと、そこには予想通りの見慣れた人影。長い金髪に白いリボンをした、特徴的なツールの子。

「あいつからわすゲーム脳ね、瑚太郎君」

「まあな。で、沙耶もご婦人様に頼まれたのか？」

「そんな所ね。じゃあ、探しましょうか」

彼女は朱鷺戸沙耶。近所に住む一年年上の幼馴染で、小鳥ともそうだ。趣味は空気銃^{エアガン}。ガンマニア、とでも言えがいいのか。銃の知識と腕だけは、どこで覚えたのか知らないが…かなりのもの。でも、その特技は残念ながら祭りの時と、ゲーセンでのシューティングくらいしか役に立たない。なんとも生かしづらい特技だ。

「にしても随分奥まで来たわね……。小鳥ちゃんがここまで深くいるのって初めてじゃない？」

「確かに……アイツ、最近活動的になってるし」

「ったく、いい迷惑よね。こう森に探索しにくるのって私達なのに」
「確かに」

この辺はまだ、森全体としては浅い方だ。もつと奥に行けば、埋め尽くされるほどの木々が立ち、地面が見えないくらい草が生える。あまり聞かないが、遭難して戻ってこなくなった奴もいる……なんて噂も耳にする。あくまで噂だけだろうが。

「お、なんか落ちてる。どれどれ……」

小鳥を注意深く探しながら歩いていると、とある一冊の本を発見する。

これは……十五点だな。誰だよ、こんなの捨てた奴。捨てるならもつとマシな所に捨てろよ……。

「何見てるの瑚太郎君」

「ああ、見るか？ 俺的には十五点なんだが……沙耶はどうよ？」

「ふーん、『おっぱい大集合。どれも選りすぐりの——』って何よこれは！」

「ふぐつ！」

視界いっぱいにおっぱいが広がる。ここまで前近で見ると余計に気持ち悪い。てか落ちてた奴だから泥付いて更に気持ちわりい……

「これだつたらまだ私のほうがおっぱい大きいわよ！ なめてんのかくらああああ！」

「ご乱心の様子。キレる意味が全く持つて分らないんだが、まあこういう子なのは長い付き合いで既に熟知済みだ。こういうときは放っておけば勝手に自爆してくれる。」

「って何言ってるんだ私はああああ！」

「はいはいはい。もう沙耶のほうがおっぱいデカイのは分かったか

らさつさで行こうぜ。日付が変わっちまうのはごめんだ」

さつさと帰りたい。気温は既に秋に入ったというのに亜熱帯かと思っくらい高い。それなのに虫の鳴き声一つしないこのキレイな森は、どこか歪に感じ……

「何でこんなに暑いだよ。今秋よ秋なのよ？ あーっ、イライラする！」

「……るわけないか」

「何か言った？」

「いや何も」

……とにかく、早く家に帰りたい。そのためには、早くクエストを完遂するしかないのだが。

「おーい、小鳥」

「小鳥ちゃん。どこー？」

呼びかけるも、全くもって返事なし。もつと奥にいるんじゃないだろうな。

全く、危ない事をするもんだ。何して遊んでいるかは知らないが。

「小鳥さーん」

「いないわね……もしかしてもつと奥？」

「だろうな……急ぐか」

そんなこんなで、騒がしく二人で歩き続ける事十五分。

「……うーわ」

いた。少し心当たる所があったので、行ってみると見事にビンゴ。まさかとは思ったが……カンは当たるもんだ。小鳥は大木に横たわってスースー気持ちよさそうに寝ていた。

「寝てるわね」

「無防備すぎるだろ……」

脱力する。

心配する必要なってなかった気がする。

小鳥の森遊びは、子供のころからの習慣だ。普通の女の子がするような遊びには興味を示さず、こうして森に入っただけ。周りから見れば浮いている。俺も沙耶もきつと、小鳥と同類なんだろうが。

「何が楽しいのかしらね……」

正直、夜の森で遊ぶのは心配だ。

でも小鳥はこの辺りの森については誰よりも詳しいし、頼まれれば探しに来るのは俺と沙耶の仕事なんだ。俺と沙耶がしっかりしていれば、守ってやれるはずだ。今も、そしてこの先も。

「じゃあ連れて帰りましょ」

「だな。おーい、起きろ」

肩を指先でゆする。ちよつとくらいなら触れても、小鳥は嫌がない。言い変えると、ちよつと以上の事はNGである。俺と小鳥の間には、目に見えない、微妙な境界線が轢かれている。

「……くー」

「こんな時間に熟睡していると夜寝れなくなるぞ」

「……くー」

「おいってば」

「……すやっ」

無反応。まあ、反応はしてるっちゃしてるが。

「起きないわね……おい、小鳥ちゃん」

今度は沙耶が強く揺さぶる。頭が左右に揺れて気持ち悪くなって顔をしかめる。浅い眠り程度ならこれで起きるだろうが、小鳥には通用しない。相当ぐっすりといってしまうているよう。

「……」

「ねえ、小鳥ちゃん。起きなさいってば」

さらに強く揺さぶる。だが、無反応。これではまるで、眠りの森の美女だ。だったら優しい口づけでもして起こすのか？ いや、さすがにそれはマズイだろう。

「しょうがないわね……。じゃあ」

沙耶は銃を小鳥に向けて、カチャリとATの銃のリロード物音を鳴らす。ただし、エアガンなので殺傷力は勿論の事無い。でも、当たれば痛い。それもかなり。

「待て待て。それは最終手段だ」

「分かってるわよ。でも、起きないならやるわよ？」

「まあその時はその時。けどな、俺は小鳥起床術をマスターしてる男だぜ？」

こんな時、とれる行動はふたつ。

「好物で釣るか、苦手な物で圧力をかけるか……だな」

ポケットに入っている秘蔵のアイテムを取り出す。茶色の円。描かれているのは『10』という数字と、京都だか大阪だかにあるらしい平等院……なんとか堂。それを一枚ずつ、音を立てながら一枚一枚、手の平に落としていく。

チャリーン、チャリーン

大量の小銭。五枚、十枚。普通の奴にとってはただのはした金だが、小鳥にとっては宝が次々に積み重なっているようなもの。いかに熟睡していようと、本能はきつと嘘をつかないはずだ。

「くふう……」

「動いたわね……」

小鳥の眉間にしわが寄った。脈有。沙耶は無駄に関心している。それにしても、さすがは小銭パワー。熟睡していてもなおかつ、その魅力的な音色は夢にまで鳴り響くのだ（小鳥専用だが）。

チャリーン、チャリーン

「うーん」

残った小銭をむくりと起きあがった。頼り無い足取りだが、きちんと二足歩行をしている。何かに操られているゾンビみたいで、どこか不気味だ。てか、操ってるのは俺って事になるのか。

「凄いわね……十円でここまで人って動かせるものなの？」

「いや、小鳥だからだろ……」

そんなこんなで、俺と沙耶は十円玉で小鳥を森の外まで誘導したのだった。

10月3日——森の搜索（後書き）

沙耶×Rewriteの小説ですが、しばらくは日常が続きます。
原作と変わって無いですが。

という事で、小鳥登場回でした。

10月3日——幼馴染

「……日付変わってるし」

「そうね……。全く、小鳥ちゃんもやってくれるわよね」

ゾンビのような小鳥を従えて、俺と沙耶は無事に街に戻る事に成功した。かなり身体が疲れてる気がする。そこまで深い所まで行っていないとはいえ、森は森だ。道路のように舗装された道は入り口近くのハイキングコースまで、小鳥がいたような場所は下は土や草、木の根に覆われている大自然な所。そんな森を、しかも夜中に歩けば、誰だって普通は疲れる。

でも、とうの張本人は気持ち良さそーに寝てるんだよね……。

「いい加減起きろ」

ちょっと頭にきたので、背中を軽く叩いてやった。

「……うつ」

「あ、起きた」

おかげでやっと目を覚ます。まだ寝ぼけてるのか、虚ろな目で周囲を見渡す。5秒ほどたった所で、沙耶と俺に目をとめる。

「あ……瑚太郎君にさーちゃん？」

腑抜けた声。少し可愛らしいこの小鳥を見ると、苦勞したかいがあると思う。幼馴染だろうと、女の子なんだ。可愛いのは可愛いし、綺麗なのは綺麗だ。

ただやはり、他の女の子に対しての感じ方とは、少しなりと違う

所があるのもまた事実。

「おはよう」

「……おはよう。ええと？」

周囲をきよろきよろと見回して状況把握を急ぐ小鳥。それが完了したのか、いきなり目を丸くして騒ぎ始める。

「わっ！ 夜だよ！ 暗いよ！」

当たり前だ。

「小鳥ちゃん寝てたわよ、森で」

「え……」

小鳥は沙耶にそう言われると、少し顔を赤くする。恥ずかしそうに手を後ろに当てている辺り、恥じるというのはあるらしい。だが森で寝てた事については、自覚症状は無いらしい。

「あ……そうだったねえ。そうかそうか。もしかしてここまで運んできてもらっちゃったり？」

「……まあ」

運んだというより、使役したと言った方があっているかもしれないが。それも小銭パワーで。

「そうかあ、お手間かけちゃったねえ」

「いいわよ別に。どうせ暇だったし」

「ありがとうね」

そう俺達に言つと同時に、にへらつ、申し訳なさそうに笑いをこぼす。

「全く……。よくまあ、森のと真ん中であんな熟睡出来るわよね……」

「いやーすごく幸せな夢を見ててね」

「夢？　どんなのだよ」

「自動販売機でジュース買ったらね、おつりの小銭が永遠に出続ける、ビックドリーム」

「うん…… 非常になんというか…… アレね」

こちらから聞いておいて言つのも何だが、高校生の割に非常に上がりな女である。今時小銭（恐らく10円の事だろう）が大量に出てきただけでここまで幸せになれるなんて、ある意味恵まれている。

「いつまでもいつまでも貯金箱にコインを入れ続ける事が出来るのだよ」

「まあ、小銭が永遠に湧いてくるんなら、そうでしょうね……」

とても目を輝きさせながら話す小鳥に、呆れ気味に頷く沙耶。見ていると面白くないコンビの漫才みたいになっている。だが、小鳥はそんなのお構いなしに安い幸せについて語り続ける。

「こないだ一千万貯まる貯金箱つてのを買ったんだけどね」

「デカイだけじゃない！」

あまりの衝撃事実に、さすがに突っ込んだ（というか、突っ込まざるをえなかった）沙耶。だが相変わらずに小鳥はその自慢話を続ける。

「いやードラム缶みたいに大きいの」

「そんなの買っちゃったのね……五百円玉のやつかしら？」

「んだよ」

「えーと、二万枚って……」

貯まるもんなのかそれは？ 一日一枚貯めたとしてもえーと……とりあえず、順調な人生ならばとくに仕事してるくらいじゃないか？

でも貯まったら願いが一つ叶う、とかだったらいいな。神様のなのが降臨して。

「人生にハリができるよ、へへー」

「……」

沙耶はもはや無言だった。

まあ本人が満足してるなら問題ないか。

「まったく……森で遊ぶのもほどほどにしないよね。探すのはこっちなんだから……」

「あはは……ごめん」

申し訳なさそうに小鳥は言う。だが、恐らくまたこれと同じような事は起こるんだろう。きっとそれが代わり映えの無い日常。

「随分と遅かったですね。何をやっていましたのですか？」

と、ここで小鳥のマダムご登場。気品と威厳に満ちた方である。何を隠そう、小鳥の捜査クエストの依頼人はマダムである。

「すみません。小鳥ちゃんが奥に行ってしまったため、発見が遅れてしまいました。それと、瑚太郎君がアホな事やってたので」

万弁の笑みで解説し始める沙耶。

おいちよつと待て。そりやおかしいだろ。まあアホな事してたのは確かだが……それ俺だけか！？ 絶対に違うって！

「何で一人でやってる事にな……」

「殺すわよ」

「……」

笑顔と右手に銃持つてるのがシヤレになってない。あれ、エアガンだと侮つてるとロクな目に逢わないんだよ。改造で威力が強化されてるし。

「分かりました。よく働いてくれました」

「へえ。すいやせん、予想外に手間取っちゃって」

俺は思わず下男のように頭を下げる。癖になりそうで怖い。

「いいえ、ご苦労様でした」

「おかあさんおかあさん、二人はいい仕事したよ。どーんとお礼してあげてよ。どーんと」

小鳥がそう言うのと、マダムは瞑想するように目を閉じた。そしてすぐにその目を開けてこう言った。

「いいでしょう。では、このほうびは後日改めて」

「やったー！ 瑚太郎君、報酬よ！」

何だろう。ミスリルのよろいとか水のはごろもでもくれるんだろうか。

「結構。では小鳥さん、帰りますよ」

貴族の波動を放ちながら、しやりしやりと去ってゆく。

「そつだ。小鳥、明日は学校来るのか？」

小鳥がじつと見つめてきたので、何となく聞いてみる。小鳥は普段学校を休みがちだ。理由はよく分からないが、小鳥曰く大事な事をしているらしい。勿論気になるので、何度か追求はしているのだが、その都度あしらわれてしまう。小鳥はこうなると、いくら突っ掛かっても口を割らないし、機嫌を悪くしてしまう。なので、理由は知らないまま。

「多分、明日は行くと思うよ。休んでばっかいられないしね」

「だったら一緒に行かない？ いい加減、瑚太郎君と二人は飽きたわ」

「飽きたとか言つなよ。俺にとっては女子と二人で歩ける貴重な時間なんだぞ」

会話の通り、小鳥がいない時は、沙耶と二人の事が多い。だからと言って、付き合つてるとかそういう間柄では無い。幼馴染のよしみなだけだ。小鳥もそつだ。

ただ、異性として意識しているかと聞かれると……多分している。幼馴染とはいえ、二人はれっきとした女の子なのだから。ただ、今の俺の真意は、自分でも分からない。多分その理由は、あの出来事がどこかで引っかかっているからだ。

「じゃあいつもの所で待ち合わせな」

「随分と嬉しそうだね。私がいるよりも、さーちゃんと二人っきりのほうがいいんじゃない？」

小鳥が嫌らしい目つきをしながら、おちよくるように聞いてくる。勿論即答してやる。

「二人なのもいいけどさ、やっぱり三人でいるのが一番だよ」

「そうよ小鳥ちゃん。二人もいいけど三人のほうがよっぽど楽しいわよ」

当たり前的事だが、沙耶も同意見。小鳥も同じようで、うんと頷いていた。

「でもさ沙耶」

「え？ 何？」

「二人もいっていうのはもしか……」

「ああーっ！ ふ、二人でもいいっていうのはあくまで二人しかないからであって……」

俺達幼馴染三人は、夜中の街中で馬鹿みたいに騒いでいるのであった。

10月3日——幼馴染（後書き）

これで10月3日は終了。

やっぱり原作とあまり変わっていない……。これから少しずつ変化を付けていけたらなって所です。

では、次話は10月4日です。

10月4日——朝

「……」

目が覚める。朝の日差しが窓から零れ落ちていて、清々しい朝……と言いたい所だが、正直気分は優れない。

昨晚、小鳥や沙耶と別れて家に帰ったのだが、何かにずっと見られてる感じがした。薄絹の束のようなものが後ろから押し寄せてくるような感触、そんなにも感じた。この時は気のせいで済んだんだ。

ただ、家でいざ寝ようと電気を消した所に突然、誰かに手首を握られた恐怖。氷のように冷たい手だった。それに腕を引かれた。腕を引っかくとさとするかのような……すごく強い力。

恐る恐る今一度自分の手首を確認した。今の事が夢ならば何もないはずだ。夢であってほしい。それで済めば楽だからな。だが、俺の手首には強い力で握られた証が、くつきりと浮かんでいた。つまりは手形が。

そして、俺は気絶した。それが最後の記憶。

「……」

自分の手首を見る。何もない。肌色の普通の色。

霊……だったのか。それとも夢で、ただの思いちがいかな。

……そうだ。きっと気のせいに違いない。都合の悪い事は忘れるに限る。考えてもしょうがないし、そんな事より現実だ。

「さて……」

今日は小鳥とも、朝登校する約束をしているのだ。気づいたら時計はいい時間を示していた。明け方に帰宅し、数時間に満たない睡眠で多少眠いが、問題ない。ベッドから重たい体を起こして、着替えを済し、軽く朝食を食べる。

そういえば……肝心の小鳥はちゃんと起きてるのだろうか？

小鳥の事だ、今頃も寝こけてるかもしれない。

充電器と接続していた携帯電話を取り、登録人数が少ない電話帳から『神戸小鳥』の名前を選択する。5コールほどで、小鳥はモーニングコールに答えた。

「もしもし、瑚太郎だけど」

『おわー！？』

突然悲鳴。と言っても、可愛い感じの。もうこの声を聞くだけで、今現在の小鳥の状況をほぼ把握してしまう俺も慣れたものである。

「ど、どうした小鳥！？ まさかまた！」

『おわー！ おわわーっ！』

「……おい」

『おわわーっ！』

「……いや、だから」

『おわーっ、おわわーっ』

かなり言動不審になっている小鳥。焦っているのが携帯越しになり伝わってくるのだが、いい加減話してくれないとこっちが困る。数度目かの悲鳴の後、やっと小鳥は俺に聞き取れる言語を話してくれた。

『今おきちゃったよ!』

結局予想通りなので、全く驚きもしない（出来ない）のだが。
今までの実例を考えると、いくらでも予想出来たという訳だ。

一応ダメ元で対策案を講じてみる。

「ちゃっちやと準備して出てこれないか？ 5分くらいなら待つ」
『クオリティ低すぎるから、30分はかかるよ……寝癖もひどいし』

普通に遅刻コースだった。

「じゃあ出れるまで俺が待つてようか？」

『いやいや、遅刻につきあっちゃいけないよ。それは悪い事だよそれに、さーちゃんが一人になっちゃう』

「沙耶とはいつも一緒だし、たまには小鳥と歩きたいんだよ」

『……嬉しいけど、すまないねえ』

微妙な反応。よく分からなかった。待つて一緒に登校しようと思って言っているのだから、少しぐらい喜んでくれてもいいと思ったのだが。さてさて現実甘いよう。

『じゃあ、さーちゃんによろしくね』

「分かった。それじゃあ、またあとでな」

電話を切り、ため息をつく。途端、家に戻る静けさ。聞こえてくるのは小鳥の鳴き声だけ。小鳥は小鳥でも、兵庫県の鳥みたいなほうの小鳥ではない。羽ばたいて空を舞うほうの、野鳥の小鳥だ。幼馴染の小鳥だが、あれでなかなか難しい。捕まえようとしてもどこかに行ってしまう小鳥のようだ。昔からそうで、そして今もそ

うだ。だが、これからはどうだ。女の子だし、いつかは誰かと結婚したりするのだろうか。その相手は、もしかしたら……

「いやいや……」

さて、時計を見ると時間がかかなり切羽詰まっている事に気が付く。中身がからっぽの軽い通学カバンを手に抱え、足早に玄関に向かう。見送りは誰もいない。そのため勿論返事も無いが、行ってきますと一言家に向けて言い、俺は門をくぐった。

「よっ、おはよー」

「おはよう瑚太郎君」

待ち合わせ場所に行くと、既に制服に身を包んだ沙耶が暇そうに立っていた。ただ待ち合わせ場所など決めなくとも、三人の家は一分圏内にあるので適当に立っていれば大概それで済むのだが。

「でだ。残念ながら小鳥は今日来ない」

「ええー！ まさか、また寝坊したって言うんじゃないでしょうね？」

「そのまさかだよ」

さっきの俺と小鳥の問答と内容がそっくりだ。ただ立場は逆になっているが。

「久々に小鳥とも歩けると思ってたんだけどな……」

「何、私と二人は不満かしら？」

「いや、沙耶と二人だけってのは全然いいんだが、やっぱり小鳥とも……」

本音だ。俺は確かに小鳥と一緒に歩きたいし、喋りたい。過去に俺は、小鳥にあそこまで迫ろうとしたんだしな。これくらい思うのは当然だ。

「そう。確かに、小鳥がいないのは残念よね……」

「まあ次からはもっと早く起こす事にするよ。んじゃ行くっぜ」
「そうね……」

沙耶の声に覇気が感じられない。沙耶も小鳥と一緒に行きたかったんだろう。朝からテンションの下がる日だ。全く、勘弁してほしいものだった。

「そういえば、今日二年に転校生が来るらしいわよ」

他愛のない会話をしながらいつもの通学路を歩いていると、沙耶が一つ話題を振ってきた。転校生。そんな話、俺は聞いていなかった。勿論、俺はそれに食いつく。

「二年って、俺の学年じゃないか」

「そうよ。でもこの時期に転校って面白いわね」

「確かに。どんな奴なんだろうな……」

ちよつと考えてみる……

？＋？＋？＋？＋？

パターン１ いきなり痛い

『ふっ……俺の名か？俺の名は閃光の狼。真の名は。。。だ！よく覚えておくがいい。それがお前の人生の最後に刻まれる名前だ』

……駄目だ。これには先駆者がいる。アイツを超える壁はデカイからな、多分こんな奴が来た所ですぐに影が薄くなるだろう。次だ。

?
+?
+?
+?
+?

パターン2 最初の挨拶で意味不明

『ただの人間には興味ありません。もしこの中に（以下略）』

……こんな事言い出すのは変な方向に知識の付いた奴か、素でか
なりの変人か、それか世界を動かせるくらいの力を無意識に持った
奴か。これも無いな……次。

?
+?
+?
+?
+?

パターン3 時間軸を飛び越えてきた

『私も。。。少女になったよ!』

……意味分かん。これは話しかけられたほうも困惑するだろ。
それに、これは自己紹介どころかただ伝えただけだろ。これも却下。

?
+?
+?
+?
+?

パターン4 空から降ってくる

……これはよくあるよな。ただ実際に残念ながらスカートの
中を
挿めたり、いきなりヒップドロップされる事は相当な奇跡が起こる
必要性がある。

「わあああー！！」

そう、結局こんな声して人が落ちてくる事なんかないだろう。現実には……ってえ？ 今何か聞こえたぞ。しかも、結構近いんじゃないか？

「今の声何だ？ 沙耶、お前も聞こえたか？」

「……ええ」

隣に歩いていた沙耶に尋ねるが、空返事で返される。でも聞こえてはいたらしく、探るような目できょろきょろしている。声の主を探しているようだ。そして、沙耶の目はある一点、坂の上にある学校近くに生えている、一本の木の所で止まった。

「瑚太郎君。あれ……何だと思う？」

今度は逆に質問される。俺は沙耶が指差している木を凝視した。どうもガサガサと上の方がうごめいているみたいだった。動物なんだろうか。それにしても、猫なんかにしては大きすぎる。じゃあ……まさか本当に？

「ねえ、確かめない？」

俺の意図を突くような提案。俺はそれに即オーケーする。断る理由も無いし、俺の本能が興味を誘っている。

「ああ。なんか面白そうだしな」
「そうこなくっちゃ！」

俺と沙耶は、チャイムという絶対的な敵が現れないよう祈りながら、木の中でうごめく何かを確かめるために、急ぎ坂道を登り始めた

10月4日——朝（後書き）

（やっと）原作と流れが変わってます。と言っても、別に大きく変更する事があるようなないような……。会話の矛盾が発生しないように気をつけなくては。

10月4日——落とし物（者）

「瑚太郎君、避けて！」

「うおっ！」

沙耶の警告を聞いて素早くバックステップをする。次の瞬間、自分がいままで立っていた場所には重量感溢れる鈍い音と共に一つのダンボールが落下していた。避けていなければ一直線に脳天直撃コースだっただろう。

「なんじゃこりゃ。ドロップ品の宝箱か？」

「ダンボールよ」

「それは分かる。でも、ダンボールが降ってくるって……」

「上よ、木の上。多分、アレが何か関係してるわよ」

上？ 上に何かあるのか？

見上げる。すると、木の上のほうで茶色い物体がガサガサともがくようにうごめいていた。別に虫ではない。動物であるのは確かなようだが、遠くてよく見えない。もう一度よく見ようと目を凝らした瞬間、

「わあああ——っ！？」

がさがさあーっ！

その物体が落下して木が大きく擦れる音と、高い声の悲鳴が盛大に俺の耳に聞こえてきた。

「あ、落ちてきたわね」

「うおっ！？ な。なんだっ？」

落ちてきたそれは途中で引つかかったようだが、先ほどとは違って何かはすぐに確認できた。だが、その落つこちてきたのが、かなり風変りなんだが。

「い、いたた……」

「うわぁ……」

まさかの女の子が天から降って来た……

服を見る限り、うちの制服じゃない。見た事の無い茶色い制服のようだ。大変な事態だったのは思いつけど、しばし思考が止まる。

木漏れ日に、薄く高い葉擦れの音。

ブロンドに近い髪の少女。羽みたいな髪飾りもついている。

「漁師の網にかかった魚みたいね、これ……」

沙耶が詩的なのか漁師的なのかよくわからない発言をする。でも的確な表現だ。もがき具合が魚そっくりである。

いや、でも考えるとやっぱり上から普通に落ちたんじゃないかこれ！？ 落ちてくるって時点で普通じゃないが……ともかく、空から落つこちてきたってのは現実離れすぎる。

「ねえ、貴女……大丈夫？」

「あっ！」

沙耶がそう尋ねると、わたわたた、と体を動かす。木の枝はゆるるが、体制は全く変わらない。身体が太い枝の隙までUの字にはまっていて、起きあがれないようだ。

そして、今にもぱんつが見えそうだりする。ヒラヒラとするスカートは、吸いつけるように男子の心を引き寄せる魔力を持っている。

こういうのを、チラリズムっていう奴だろうか。

「大丈夫じゃないみたいです……降りられません」

「いや……あれだけ盛大に落下して降りられないで済んでるの、逆に凄いと思うわよ」

「済んでません、あちこち枝で擦りきれて痛いです」

「だから、それで済んでるのが凄いのよ……まあいいわ」

顔をこんな感じ（<―>）にして言っているが、とにかく大怪我はなさそうなので、そう焦る必要はなさそうだ。

そう思うと、パニくっていた頭も冷静に動き始める。とりあえず、隣にいる優秀なパートナーに意見を乞う。

「なあ沙耶、これどう思うよ？」

「どうって、貴方が思うようRPG的な要素は無いでしょうね。そのダンボールだって、キーアイテムが入ってるけど、鍵が無くて開けられない……みたいな箱じゃないし」

確かに。ダンボールには引越し業者お馴染み、アリクイさんマークのロゴが入っている。宝箱でもなく、魔法のツボでもないそれは、ファンタジックな要素ゼロ。不思議要素は皆無だった。

「あの子だって、天から降って来たわけでもないでしょ？ どうせあの辺の坂から落っこちて……って時点でかなりおかしいけど、それは置いておいて。まあ足でも踏み外して落っこちたんでしょ？」

「ガードレールあるのに、どうやって落ちるんだか……」

落ちるか普通……？

「そっいえば古臭い外国かなんかのアニメで、ダンプにどっかああ

ああん！　っ　吹っ飛ばされたキャラクターが、荷物と一緒に豪快にぶっ飛んで、荷物をとどける。なんてのあつたわね」

「ああ、それにチャレンジしたのかアイツは」

ぴゅーんと飛んできて、『ちわー、お届け物です！』これで配達完了。

うん、これは確かに早い。そして効率的で環境に優しい。エコとか騒がれてる今だからこそ流行りそうな方法だ。きつと世にその素晴らしさを伝えるために、体を張って挑戦したんだろう。

「いやつつつほおおおー！！　今がチャアーンストッ！！　とばかりに突っ込んで、ぴゅーんとぶっ飛ばされてここまですりついたが、着地に失敗した……という感じがしらね」

「説明はバツチリつくな。つきはするが、それは普通死ぬからやっぱありえない」

「そうね。で、アホな話は止めにして……どうする？」

アホな話に区切りをつけ、俺と沙耶は再び目を上に。先ほどの変わらずわたたと身体を動かして脱出を試みようとしているようだが、以前体制は変わらないまま。必死でスカートを抑えて（と言っても、角度を変えれば多分見える）海老みたいなひの字になったまま。

「なんだってまた、こんな状況になったんだ？」

「落ちたんです」

「そりゃそうでしょうね……」

普通だ。いたって（あんな所から落ちるのはともかく）普通だ。まあ、動けないと言うならば、それは人として助けようと思う。沙耶も沙耶で、何かしらの方法で助け出そうと思っていると思われた。

「しょうがない……登って救出するか」

「それが最善ね。じゃあ私は下から補助するわ」

「オッケー」

さてと、こういう時こそ男の出番。俺は木に登ろうと足をかけ、手を伸ばして飛び出ている枝を一つ掴む。少し揺さぶって折れない事を確認して、懸垂で一気に体を上げようとした所、短い叫びみたいなのが聞こえる。沙耶の物では無いから、必然的に俺の上にいる女の子の声になる。

「あっ！」

「ん？」

「ぱ、ぱんつ見たら怒りますよ!？」

いや……返答に困るんだが。

「いや……別に見るつもりも無いけどさ。ただ、その体制でこの角度だと既に危ういんだが」

「私はもう見えてるけど？」

「わーっ! わーっ!!」

短いスカートのすそで必死に隠そうと試みている。が、大して変わらなない。

思うんだが、ジョシって連中は、何故そんなに見られたくないってのに、わざわざスカートを短く履くんだろうか。

「お、男の子はこっち来るなら絶対見ないでくださいっ！」

「見ないでって言われても、なんか登るとき上見たらそれでアウトじゃね? という感じた」

後一歩足を進めれば、まず間違いなくその神秘の空間の中が俺の目に飛び込んでくるだろう。

「それでも見ないでくださいっ」

「おいおいお嬢さん、じゃあどうしろって言うんだい。助けなくていい？」

「だ、だめですっ、助けてくださいっ！ 降りられませんからっ」

じゃあどうしろと……。俺は少し離れた所で腕を組んで立っている沙耶を見る。何？ と言わんばかりにこっちに振り向いた所に、一つオーダーを試してみる。

「じゃあ俺の代わりに沙耶が登っ——」

「制服が汚れる」

即刻オーダー拒否されました。

「そうでございますか……」

まあ確かに、うちの制服は白が基調だ。女子のなんかは純白と言えるんじゃないかというほど真っ白だ。でも、俺も制服なんですけどね……。まあ汚れても気にしないが。

ならばどうするか。なんとという難題……。

ためしにちょっと角度を変えてみる。

「……あ」

やべ、ちらっとピンクが見えた。

「なんかで隠せないか？」

「動けないから無理ですー」

なんか怒ってるみたいと言われる。でしょうね。動けたらお互い苦労しませんもんね。はい、野暮な質問でしたすみません。

「じゃあつまり、上を見ずに、あんたもほぼ視界に入れずにここを登って救出しろと」

「です！」

元氣な返事ありがとうございます！

「よし沙耶。見なかったことにして通り過ぎようぜ」

「あーっ！？ なんですかそれ冷たすぎませんかっ！？」

「だって無理なんだからしゃーないだろ」

「それでも男ですかーっ！」

いや、男だと思ってるからぱんつ隠してるんだろとツッコミを入れたいんだが……。にしても、礼儀知らずというか、助けてもらう側なのになんだってあそこまで注文多いんだ？

「まあ、俺は何も見えないから気にせず通り過ぎるよ……。えろ紳士に見つかって『グッパン（Good Pants!）』とか言いながら写メ撮影されるなど、俺に見られるよりよほど悪い状況を想像しながら待ち続けているがいいさ」

「それはありえないでしょ……」

実際そんなえろ紳士等見た事無いハズなんだが、想像が容易に出てしまうのは何故だろう。親指を突き立てながらウインクをする髭を生やしたおっさんの姿が脳裏に浮かぶ。

「そ、そんなのいやですっ」

「瑚太郎君、誰もいないのに何を言ってるの？ さっさと行かないと遅刻するわよ」

「おっと、悪い悪い、独り言を言っちゃった。さて、筋肉でもしながら学校に向かおうぜ」

俺は両腕を縦に揃えて、左右に振るようにダンスをする。沙耶も一緒に合わせて腕を左右に振る。よし、行くぞ！ さあ、みんなも一緒に踊ろうぜ！

「はい、筋肉筋肉っ」

「筋肉筋肉っ」

そして世界は筋肉に包まれた……。

「ぷすっ」

「なんかウケてるわよ……大丈夫？」

「さあ……？」

これまではウケる以前に引かれまくってた滑り確定なネタなんだが、どうやらウケてしまったようだ。筋肉恐るべし。

「ってわけわからない踊りしながら行かないでくださいっ」

「じゃあ見えてもいい？」

「だ、だめですっ」

「じゃあ、グッパン！（Good Pants!）」

「わ、わかりましたからぁっ！」

もう一度歩き出す。だがかなり必死っぽい声で泣きつかれたので、

しょうがなく足を止める。何だかんだで見捨てられないのが俺の性格。結局木を登り、下の沙耶と連携して降ろす事になった。今度はかりは観念したようで、先ほどのように騒ぐ事なくおとなしくしていた。

……因みに、ぱんつはさくらんぼでした。

10月4日——落とし物（者）（後書き）

長さが中途半端になってしまったので、このシーンは次まで続きます。

10月4日——嵐のような転校生

「はあ、助かりました……」

「にしても凄いわね。本当に怪我してないの……？　どれだけ頑丈なのよ」

全身を見渡す限りでは、髪が少し乱れてるのと服が汚れてる以外は特に自然体。あの高さから落つこちたら、普通はアザの一つや二つ出来てるハズなのだが。奇想天外な女の子である。

「実は私、こう見えて転校生なんです」

「へー」

こう見えるも何も、どう見ても転校生としか思えないだろ。待て、それじゃあうちに来るって言ってた転校生はこいつか。

本当に空から降って（転落して）来たって事か……。ダイナミックな転校生である。

「それが、この学校の位置がわからなくて……。ようやく見つけてここまで歩いて来たんですが、疲れて荷物をガードレールにおいて休んでいたところ……」

「バランス崩して、物の見事に大落下ってわけね」

「そりゃまた見事におマヌな……」

「う、うう……」

となると、やっぱりあの上から落下したわけだな。マジで何で怪我しなかったのか。俺が落つこちたと考えると、気付けば頭に輪っかと、背中に羽がついている自身ある。

「いやあ、ドンマイ。そういうこともあらーな」

「まあ誰だつてミスはするものだわ。人生ゲームオーバーなミスはしたくないけど……」

快活な笑顔と言葉を二人で言い慰めてやる。それが恥ずかしいのか、転校生は顔をリンゴみたいに赤面させていた。もしかしたら怒ってるのかもしれないが、微妙なところだ。

「うう……く、屈辱です……」

「じゃ、行きましようか。もうチャイム鳴っちゃってるから急いだほうがいいわよ」

「はい？」

「学校よ。行かないの？」

「あの、屈辱に打ち震えてるんですが」

沙耶と転校生が会話を楽しんでいる間、俺は空から落っこちてきた女の子の物と見られる段ボールに手をつける。あれだけの高さから落っこちてきた割には、若干凹みがあるくらいで原型は保っていた。物まで持ち主に似ているのか……。

ひとまず、親切に持って行ってやることにしよう。見た感じ側面にある持ち手の穴は幸い無事なので、指をかけて腰を上げる。

「……これただの荷物だよな？」

上げて十秒としないうちに、すぐにダンボールを地面に戻す。なんかおかしいぞ……？ これって女の子が持ってたんだよな？ そして持ちながら街中さまよってたんだよな？ だったら今のはありえない……。

俺はもう一度穴に指をかけ、腰を上げる。

「……!？」

や、やっぱり重い!? それも半端な重さじゃねえ……! ブラウン管テレビくらいの重さはあるんじゃないか?

「ぐっ、ぐおおおおおおー……」

重さに耐えきれず、思わずどがあつと取り落としてしまう。

「……」

馬鹿な……。そんなハズはない。女の子が街中歩きながらずっと持ってたんだぞ!? それを男の俺が持てないなんて……。肉食系男子には分類されないだろうが、貧弱なつもりはない。むしろ腕力は強いほうだと思う。

ためしにさっきの木にぶら下がり、懸垂を試してみる。

「筋肉、筋肉」

軽快だ。とすると、やはりなんかの間違えだ。もう一度、今度は下から抱えるように試してみる。

「ぐっ、ぐおおおおおおー……」

やっぱり重い。あつという間に腰が悲鳴を上げた始めた。

嘘だ……。嘘だろ? これはただの間違いだ……。これは女の子が細腕で持ち上げて、数時間さまよっていられる重さのダンボールなわけだから。

「さっきから一人で何やってるの?」

引き気味な感じで沙耶が横に現れる。まあいきなり懸垂してダンボール一つにここまで手間取っていたらそれはそう見えるだろう。だが丁度いい。

「沙耶か……。ちょっとこのダンボール持ってみろよ」

まあいいけどと言い、沙耶が腰を降ろしてダンボールを両手で持ち上げる。持ち上げはするのだが、その上昇は膝の辺りで止まる。腕がかなりプルプルしている。

「重いいいっつつっ!!」

どがあつと音を立てて、ダンボールは沙耶の手から転落する。それが丁度、俺の指先に着地。もし、ブラウン管テレビが人の指先に落ちたら、どんな反応が見れるだろうか？

「いつでえええええー!!!! 砕ける、骨が……砕けるっ!!」

「あ、ゴメン。大丈夫？ 今どかす……って、あ」

どがあつ。

沙耶が俺の足からダンボールをどかそうともう一度持ち上げると、素晴らしいタイミングで転校生が沙耶にぶつかる。そのわずかな衝撃のせいで、沙耶の手からダンボールは滑り落ち、それは再度俺の指先に。

「ぐがああああああー!!!! 俺の足をミンチにでもする気かああああ!!」

「こ、これも訓練よ、訓練」

死ぬ、死ぬうううー！ー！ー！これ冗談抜きでヤバいから！早く、早くどけてくれえええええっ！！

俺は上半身をくねらすようにしてひたすら暴れる。冷静に考えれば自分で持つてダンボールをどかせばいいのだが、人つてのはこういう緊急事態に限って冷静さを欠く物だ。

例えば人が放った右手渾身のストレート。右に体を少し傾ければ避けれる物だ。しかし避けれない。結局、事前に訓練していなければ無意識に恐怖を感じてしまい、体が動けないんだ。これも、それと同じ。人は咄嗟の行動を起こせないのだ。危険な場面になればなるほど。

「あ、もしかして私のせいでしたか？」

「まあそんな所ね」

「それはすみませんでした」

何で沙耶に謝るんだ。被害受けてるのは俺だ！という突っ込みは置いておいて……。

申し訳なさそうに転校生は俺の前に立つと、指先の上のダンボールをひょいと軽々しく持ち上げる。おかしい、絶対におかしい。あの重さをあの女の子があの細い腕で……

「ありえない……そんなわけ……」

「いい加減認めなさい。この子は超剛腕で、格ゲー大会では禁止にされる程のパワーファイターなのよ」

やれやれね、と言って沙耶は手の平を空に向けて言う。例えば意味不明だったのはとりあえずスルー推奨という事か。それより、俺の上に荷物落としたつてのに微塵も申し訳無さが現れて無いのだが

……。まあいつもそんな感じと言えばそうなのだが。

「で、さっきからなにしてるんですか？」

「確認だ」

「意味がわかりません」

どっちかと言うと、意味が分からないのはそっちのほうなんだがな。

「よし、じゃあいこうか」

ダンボールを受け取る。その瞬間、ずいっと強烈な重さが両手を襲う。なんとか自分にたがだかダンボールだと自己暗示をかけ、その重量に耐える。

「ぐつ。ぐおおおおおおー……」

「ねえ瑚太郎君。努めて冷静に振舞おうとしてる意味のわからない努力は認めるけど、顔真っ赤で血管浮いてるから」

「照れてるのさ」

すまし顔（血管浮いてる顔でらしいが気にしない）で涼しげに答えてやる。何故そこまでやるかって？ そりゃ女の子に荷物持たせて、自分は楽にしてるなんてプライド的にどうかと思うだろ。

「あのー……重いんですか？」

「女の子が細腕で持ち上げて、街中さまよっていられる重さのダンボールが重いはずがないだろう」

「いや腕プルプルしてるし、声震えてるから」

女の子二人に囲まれて、必死にとてつもない重量に耐える俺。何

か絵的に非常に痛々しいが、ここまで来たらこれを落とすわけには
いかない。最後まで届け切るのが男としてのプライドだ。

「武者震いさ……」

「足もガタガタな状態で、何馬鹿な事言ってるのよ。アホじゃない
の？」

「そうです。私持ちますよ？ 力強いですし」

アホだと……？ 知った事か。ここで俺はこれを渡すわけにはい
かないんだ。妙な使命感に駆られつつ俺はそれに答える。

「俺の男の子としてのプライドがゆるさない……！！」

「じゃあそのプライド、ズタズタにしてあげようかしら」

そう言った矢先、沙耶がどこからとなくエアーガン（強化済み）
を取り出し、カチャリとリロードする。いや、今そんなのに撃たれ
たらマジで死ぬって。

「いいから持ちますから」

「えええー……」

そしていつのまにか転校生は俺の目の前に移動しており、ダンボ
ールに手をかけていた。そのまま自分の元に取り返すつもりだろう
が、こつちとしてもそういうわけにはいかない。だって、かっこ悪
いじゃん。

「む」

ぐいと引っ張られる。俺はそれに抵抗してそれより強めの力で引
っ張る。

「むむ……」

ぐいぐいと、さらに力を入れて引っ張られる。でも負けるわけにはいかない。俺もさらにぐいぐいと引っ張り返す。

「いいからっ、渡して下さいっ!!」

転校生が痺れを切らしたようにキレ気味に力を込める。瞬間、ぱりっ和小さい効果音。それが今起こってしまった全てを論じていた。

「あ」

「えっ？」

そう、落下に落下を重ね弱っていたダンボールが破けたのだ。

「うおおおおおっ!!」

「わっ……」

「ヤベっ……」

そのせいで引っ張った力が行き場を無くし、転校生はバランスがとれなくなり、体が後ろに傾き始める。そのまま転倒するだけならよかったのだが、生憎転校生の後ろは坂。そのまま転倒し、勢いを保ったまま……

「わあああーっ!!!!」

どさあっ! ゴロゴロごろごろがっしゃーんっ!!!!

盛大に坂を転げ落ちていき、そのままガードレールに突っ込んで

そのまま下に落ちていった……。

「……」

無言で横を向くと、丁度沙耶の顔が正面に来る。口をポカーンと開けて、目を丸くしていた。多分、俺もこんな表情なんだろう。

そして暫く向かい合った後、二人同時に坂を下り、あわててガードレールに駆け寄り下を見下ろす。かなりの高さ。もし俺が落つちたならば、頭に輪っかがついて、背中に羽が生える自信がある。意味のわからない自信だが。

「おーいつ、えーと、転校せーっ!」

「もしもーし、生きてるー?」

二人で一緒に声を張り上げる。数秒待っても、返事が返ってこない。おいおいやめてくれよ。もしこれで音沙汰無しだったら冷や汗物だぞ……?」

「い、いたいです」

幸い、少しの間の後下のほうから呑気な声の返事があつた。どうやら生きているようだ。見れば、また木に引っ掛かっていて、魚みたいにもがいていた。二回続けてとは、運のいいやつだ……。根本的には悪いのかもしれないが。

「何てことするんですかこの人でなしーっ!」

思いつきり糾弾される。え、いや……俺、悪い?

ともかく、あの元気ならばとりあえずは無事な様子だ。

「つて、わああーっ！」

「あ、また落ちたわよ」

ばさささつと、盛大に葉擦れの音が響く。

「うつわー、凄い転校生ね。いい意味でも悪い意味でも」

「ああ……」

沙耶の総評には頷ける。後補足すると、さくらんぼだったという事だろな。

そんな事を考えているとふと、騒がしいサイレンを鳴り響かせて救急車が急行して来た。転校生の所まで来ると通り過ぎるのではなく、落ちたと思われるその地点で停車する。

「あーこれつて、あのまま運ばれるパターンねあの子」

「だよなあ……荷物どうしようか」

と、後ろのドアが空いて、担架を持った救急隊員が現れる。救助対象は、勿論落つこちた転校生。横に担架を置いて、ものすごく手際良く転校生をその乗せ、救急車に収容する。そのまま救急車はドップラー効果なサイレンの音と、『大丈夫ですつてばあああああーっ！』という叫び声だけを残し、走り去っていった。救急車が到着してからわずか30秒の出来事だった。

「嵐のような転校生だったな……」

「かなりデンジャラスな子だったわね……何故か心配する気にはなれないけど」

「まあ大丈夫だろ。なんか、頑丈そうだったし」

「そうね。アレならどんな高さから落つこちても大丈夫そう」

さすが、転校生は事件を引き起こしてくれる。特にこの転校生は話題性抜群だろう。初日に坂から落下し、救急車に搬送されるなど、そうそうお目にかかる物でもないだろうしな。

「で、この荷物どうするよ……」

「焼く？」

「いや、証拠隠滅してどうする……」

……結局ダンボールは、学校から台車を持ってきてわざわざ運ぶハメとなった。

10月4日——嵐のような転校生（後書き）

ちはや登場シーン（終）

文章にしてみると、ここが意外と長かった事に気がつきました。

10月4日は続きます。

10月4日——エース

荷物を職員室に届けた時には、既に時刻は1時間目終盤になっていた。

幸い俺のクラスの副担任（言われるまで存在に気付かなかった）が職員室にいたので、事情を説明した所、1時間目は出席扱いにしてくれる事となった。

落つこちて終いには救急車に運ばれた超パワーファイター転校生の話を全てを信じてくれた副担任には、感謝しまくりである。

「遅い……。ちゃんと来るんでしょうね？」

で、今はなんとも平和な昼休み。心地よい秋の日差しを感じる今を思うと、朝の嵐のような慌ただしさが嘘のようである。

だが、その平和な昼休みもすぐに騒がしくなりそうだった。

「ああ、ぬかりは無いぜ。そろそろ……お、来た」

で、今俺は何をやっているのかと言えば、沙耶と一緒に、吉野と愉快にスキンシップを図ろうとしているわけなのである。バットボーンな吉野と遊ぶなんて、最高の計画だ。

「お、噂をすれば」

そして昼休みのスペシャルゲスト。音速の狂犬、吉野が姿を現した。

？＋？＋？＋？＋？

「おい吉野、俺とデュエルしろ！」

立場が普段と逆な気もするが……まあいいだろう。

俺は、血に飢えている狂犬、吉野晴彦に面向かってそう言い放った。

普段俺はこういう類の事を避けてるため、俺の珍しい行動に吉野の反応も好調だ。

吉野というのは、この能天気な程に平和な風祭学院唯一の不良とも言える男であり、孤立無縁のアウトロー。そしてどうも、俺の事を常に目の敵にしているようだ。

「ふつ、まさかお前からそんな言葉が聞けるとはな……。なら遠慮はしねえぜ！」

「そうだな。ならばもう語る事は無い……行くぜ！」

そう言っただけで吉野は、目にも止まらないマッハな速度で、右手を振りかざし、決闘盤を展開する。俺も対抗し、同じ右手の決闘番を前に突き出す。お互い一步も譲る事の無い、熾烈な争い。火花が弾ける、壮絶な戦い。

「俺のターン、ドロー！ ふつ、世界の始まり。天と地が出来し時から使者……。その力を、今こそ時放ってやるぜ……」

「甘いな。俺はお前の手の内は全てお見通しだ……。リバーズオーブン！」

と俺が高らかに宣言したと同時に、吉野が右手のそれを叩き落として叫ぶ。どうやらご立腹のようである。さして俺は何かしたのだろうか？ どっちかっていうと、お互い楽しく遊んでいたじゃないか。

「何やれせてんだよてめえ！」

「いやいや、たまには楽しくデュエルするのもいいかなーと」

「ちっ……」

「お、おい。どこ行くんだよ？」

「知るか」

孤独で寂しげな背中を俺に向け、足早に去っていくこうとする吉野。その背中がどこか、誰かに構ってもらいたげな雰囲気漂わせている気がする。

なので俺は、アイツに絡む事を辞めない事にする。

「分かった分かった。じゃあ改めて、昼休みにデュエルしようぜ」
「……何？」

相当俺とデュエルしたいのか、そう言っただけで吉野は振り向いた。こういう時は、単純な奴で助かる。他の奴には無い魅力が、こいつにはあるのだ。その部分がどこか、俺と類似している気さえする。正反対だが、似ているような気がする。吉野風に言くと、光と影。つまりは、カオスな関係と言った所だろうが。相性は最悪だが、お互いどちらかがいなければ生まれない。相互関係なのだ。

「本当だろうな……？」

「ああ。じゃあ昼休み、外で待ってるぜ」

そして俺は、軽く遊ぶ気持ち程度で吉野を誘ったのだった。

？
+？
+？
+？

「こう、エースが集まるといっなのは壮観ね」

「その通りだな。たまらないぜ」

「ふつ、何を言う。エースは一人だけだ」

吉野は鼻で笑いながらそう言った。

俺と吉野と沙耶の三人が、互いに目を光らせているこの緊迫感。吉野に言わせれば、この張り詰めた空気が身も心も躍るくらいにたまらないらしい。

乾いた火薬の咆哮が唸りを上げて火を吹けば、一人の命知らずが生まれ、一人の命の灯がそこで尽きるという事。

「最後まで立っていられた奴だけがエースってわけね」

「成程。そりゃ面白い」

「ああ……」

乾いた風が、睨みあう三人の間を吹き抜ける。

ここ校舎裏という学校の死角は、まさに命知らず達のセメタリー。

「で、お二人とも。抜かないでいいのかしら？」

「そっちが先でいいんだぜ？」

「粹がるなよ。指が震えてるぜ？」

敵同士だというのに、妙な笑いをこぼし合う命知らず達。だが、お互いに警戒を鈍らせることは無く、隙は今かと伺っている。

校舎裏という荒野で対峙する三人の命知らずは、慎重に間合いを測り合う。もう決闘は始まっている。誰が先に撃つてもいい。唐突に決着がついたとしても、それはそれで決闘の結果だ。誰であろうと恨む事は許されない。それが暗黙の了解であり、ルールだ。

「……」

「……」

「……」

こんな緊張感の中であるからこそ、生まれる一体感という物がある。

三人は同時に銃を抜き、その引き金に手をかける！

「全員、これでお別れだあああああああ！」

「消えろ、臆病者おおおおおおお！」

「上等だオラァアアアアアア！」

バツ、ババツ！

三人の決闘者たちは一斉に獲物を抜き、撃ち放つと同時に自ら目掛けて軌道を描く銃弾を横に飛ぶように動き、避ける。

乾いた音と共に宙を進む弾丸は、それぞれが鋭い金属音を放ち、彼らの背後にあつた空き缶を弾き飛ばした。

「ちっ、やりやがる……だが！」

吉野は避けた場所ですぐに体制を取り直し、次弾の発射目標に銃口を向ける。その黒光りする銃の矛先は、俺のLP（ライフポイント）……空き缶に向けられていた。

すかさず俺も、吉野の空き缶に標準を定める。その時、俺と吉野との間で、視線が交差する。

「オマエとの腐れ縁もこれまでだ！ しねえ吉野おおおおお！」

「上等だ！ お遊びはこれでおしまいだぜええええええ！」

そう、このゲームは互いにゴミ捨て場から持ってきた空き缶を倒すゲーム。

円内にぐるりと、10本ほど立てられたそれが、己のLP。その

円の中には相手は入れない。その外からエアーガンで、相手の空き缶を狙うのだ！

「うおりゃああああ、ぬおりゃああああああー！」

「遅い遅い遅い！ 俺の早撃ちを見ろおおおおおー！」

パン！パン！ パパパパパン！

激しい銃声が校舎裏に響く。常人では越えられないであろう、超高速のスピード連射。瞬く間に吉野の空き缶は倒れてゆき、カランと虚しくその命を散らしていく。

パパン！ パパパパン！ パパパパパパン！

だが、ここで俺は異変に気づく。

俺の銃は確かに連射性に優れたATだが、スピードが異常だという事に。

「ま、まさかっ！？」

俺は背後、自分の空き缶を確認するために一瞬だけ振りかえる。すると、俺の缶は凄まじいスピードで倒されていた。顔を前に戻し吉野の顔を窺うと、驚きが隠せないとも言いたげな焦りをアイツから感じた。

「アッハッハッハ！ 弱すぎて話にならないわね！」

犯人は沙耶。俺と吉野が互いの攻撃で注意が散漫になっている所で、両手で構えた銃で一気にLPを削りに来たのだ。

普通で考えれば同時に逆の方向の標的を狙い、しかも外す事無く確実に撃ち倒す等、常人の為せる技では無い。しかも二丁同時に。

だが、沙耶はそんな人間場なられた技をやってみせていた。

「く、くそっ！」

「ヤロウ……やりやがったな!!」

俺と吉野は慌てて沙耶のLPに狙いを定め、まるで連携しているかのように同時に銃弾を放つ。だが倒れない。勿論それは、俺達が放っている銃弾は命中していないという事。

この時、沙耶と俺達では決定的な実力差がある事に気付いたのだ。

「え、エースだ……」

無力という現実打ちのめされた俺は、思わずそう呟いた。

だが、吉野はそれを否定し、こう言い変えた。

「そんな生ぬるいモンじゃねえ……。ああいうのは完全無敵って言うんだよ」

そして、チャイムとほぼ同時に俺の最後の空き缶が倒れ、敗北が決定した。

10月4日——エース（後書き）

最後の纏め方が……そして吉野初登場回でした。
原作だともつと後のネタですが、そこはご了承を。
まだ10月4日は続きます。

10月4日——嫌われる

「終わった」

本日最後のHRも終わり、終業のチャイムが鳴る。この音を聞いた時ほど心が躍るのは意外と無いのかもしれない。

「おつかれー」

俺が席を立つと同時に、本日見事に遅刻してきた小鳥からの気の抜けた優しい声。いつ聞いても心が和むこの声。聞き慣れていると言えはそうなのだが、毎日のように聞ける事が安心でもある。

俺の過ごす日常において、欠かすことの出来ない声。

「授業わからんかったろ」

「うん……」

本日もめでたく遅刻してしまった小鳥から、苦笑いで返事が帰って来た。

まあ近頃連欠してたので、学校に來ただけまだ進歩と言えはそうなのだが。

「ここ数回で一氣に進んだからな。中間テスト、危機だな」

「まじやばいかもだよ」

テストというのは学生に襲いかかる最難関とも、ある意味でこれを受ける事こそが本業言えるだろう。

俺は幸いそれなりの成績をキープしているのだが、休み気味な小鳥は毎回テスト前に焦る事になるのは日常茶飯事。

「そもそも出席日数からしてやばいんじゃないのか？」

「それは平気だと思う、ぎりで」

「小鳥は部活もやってないしさ。先生も評価しにくいぞ」

小鳥という人間は、

『学生時代を通して帰宅部に所属し、おうちに帰る事の大切さを学びました』

と面接でアピールしかねないほどの家女だ。

自宅兼森林警備員と言わんばかりに、家と森ばかりにいる気がする。学校が無い時は実際にほとんどそうだろう。一人で何をやってるのかは知らないが、いつも心配でしようがない。

そんな事を思っているが、俺もついつられて帰宅部になってしまった。

「テスト前にはやっぱり、二人で沙耶に押し掛けるか」

「だねー。困った時のさーちゃん頼り」

俺達二人はテスト直前になり焦り始めると、大体は一応先輩である沙耶に詰めかけて勉強を見てもらう。

アイツは先ほどの銃撃戦のような事を始め、漫画やらゲームやらで普段から遊びまくっている割には、何故か優等生並の成績を維持している。おまけに教え方も上手いと、俺達専属の家庭教師のようになっているのだ。

「と、いけね。時間やばいな」

ふと教室の時計を見ると、約束の時間に向かって針がかなり迫っていた。

「何かご用事？」

「バイト面接のようなものに、ちょっと」

「バイトすんだ」

「……ちょっと変わったバイト」

俺がその募集記事を見つけた時に抱いた感想そのままに言う。レジ打ちをしているような普通のバイトでは無く、少し異質なバイト。どちらかというと学生からは避けられそうなバイトだが、逆に俺はそれに惹かれた。

「どんなの？」

「一緒に来るか？　すぐに終わると思うけど」

「うーんと」

念じるような声を出して、少し考える小鳥。返答は俺にとっては少し残念な物だった。

「今日はよしとく。しばらくぶりの学校だし、友達とお話でもしていくよ」

友達とお話……ねえ。…いや、踏み込むまい。

「そうか。じゃ、また明日な」

「その予定だよ。またね」

という事は、小鳥は明日も学校に来てくれるという事だった。となると、学校に行くの楽しみが増える物だ。

？＋？＋？＋？＋？

「げ」

帰り際職員室の前を通ると、今朝の騒ぎの末、落下して救急車に運ばれた転校生とばったり会った。

人の顔見るなり険悪な顔をされ、開口一番『げ』と言われるとはたまったものではない。

「うーん…俺なんか嫌われるようなことしましたかね？」

「言う事欠いてなんですかそれはっ！ あなたと出会ってから災難続きです！！ 三度も落ちるわ坂は転がるわ救急車に連れて行かれるわっ！！！」

段々声でかくなってるって……

それにおそらく三度のうちの一度には、俺は関与していない。

「そついやあの後どうなったの？」

「事情を話しても聞いてくれなかったので、ムリヤリ脱出してきました……」

おー、きつと映画顔負けな脱出劇だったんだろうなあ。警備員をなぎ倒したりバイクで門を突っ切ったりでもしたんだろう。是非見てみたかった。

「それもこれもっ！ 全部あなたのっ！！」

俺が特撮映画（死語）のような想像をしていたら、目の前でとどめとばかりに大声を張り上げながら叫んでいた。

「あなたと出会ったせい・で・すっ！！」

最後は唾を飛ばすほどに、一語毎に強調して言われた。

「えー？　むしろ俺助けに回ったほうだと思っただけど……因果関係を俺に結び付けられても困る。ダンボール破れたのも俺のせいじゃないし……。大体俺がいなかったら今頃さくらんぼ」

大航海時代……と、心で念じておく。

「ぎゃあー！　何で知ってるんですかー！！？」

今まで聞いた声の中で一番大声な悲鳴。目までまん丸くして、相
当な驚きとショックを受けている様子。これは禁句だったようだ。

「ソーリー」

「うう…今度言ったらただじゃすみませんよう……」

なんか相当うなだれている。そんな見られたくないならスカート
もつと長く履けよと思ってしまうのだが、過去同じ質問をある奴に
したら『それが乙女心なのよ』と言われた事もある。

余計に女つてものが分らない……。

「あら、今朝の転校生じゃない」

俺の背後から聞き覚えのある声が聞こえる。振り向くと予想通り、
今朝のもう一人の関係者の沙耶が立っていた。

その姿を確認してすぐ、転校生は沙耶に向かってこう言った。

「あ、今朝はありがとうございます」

何でしょう、この俺との態度の違いは。同じく救出活動をしたは

ずなんだが。どうもここまで扱いが違うつてのは腑に落ちない。

「いいわよ別に。実際大したことでないし。えーと、確か鳳ちはやさん……で合ってるかしら」

「あ、はい」

そういえば名前知らなかったな。鳳ちはやってのか。

……鳳ちはや〃さくらんぼ、

成程、覚えやすい名前だ。

「鳳さん、瑚太郎君と同じ二年生よね？ それも、クラスは同じになる予定。随分と仲良さ気でいいじゃない」

「お、そうなのか。よろしくな、鳳」

「あ、ああ。それはよろしくです……けれど」

一応そこはちゃんと挨拶するのなと思いきや、すぐに血相変えて言われてしまう。

「けれど、私はあなたが嫌いです！」

「ええ……」

親切が仇となった結果が、キリッとした目で睨みつけられた上のこの暴言。いったい何でこんな事になってしまったんだろう。もっと普通の出会い方をしていれば、打ち解けて仲良くなれたのかもしれないのに。

「なあ……俺達、やり直せないかな……」

「は、はい？」

「出会ったころ、みたいにさ……」

「……」

鳳はそれを聞いて、ぽかーんとしたまましばらく沈黙する。
そして旧型PCのような遅さでやっと起動。

「ななっ」

とりあえず鳳ちはやという人間は、物事に対しての反応が色々鈍いらしい。

パワーファイターな辺り、動物に例えると像もしくは恐竜が合う気がする。

「へー随分とラブラブね」

「違います違います！ 何誤解されるようなこと言ってるんですか
！！」

必死にそこまで否定していると、本気で勘違いされそうな勢い。
通りすがりの生徒からも、「え……あの転校生、天王寺の元カノ？」なんて声が聞こえる。まだクラスに紹介すらされてないのに、行動といい服といい色々が目立つ転校生である。

「あ、ああっ、ほら、勘違いされてるじゃないでか！ ほら、否定してください！」

「で沙耶。何で鳳の事知ってんだよ。朝初対面だろ？」

「フフフ…知らない事があれば探るのみよ」

「聞けーーーーっ！！！」

廊下にこだまするくらい大きな叫びに、多数の人間がこちらに振り向き注目する。転校生は「ゼーっ、ゼーっ」と荒い息使いになっており、顔もかなり火照っていて興奮しているよう。ただでさえ目立つというのにこんな事まですれば、明日紹介される頃には色々な

意味で時の人となれそうだ。

「……どーも仲良くなれそうね」

「だな」

「はっ？」

まさか、というかやはり転校生はからかわれていた事に気づいていなかったらしい。さすがにここまで来ると天然もいい所だが、とにかく面白い奴である。

「うわああーんっ！！ みんな嫌いですうーっ！！！」

さてと……そろそろ行かないと本気でマズイ。この感じだと全力疾走でもしないと待ち合わせ五分前に到着という社会人としてのマナーを守れそうもない。

「じゃ、俺用あるから行くわ」

「あっそ。んじゃね」

そそくさと退散することにする。

「……」

だが歩き始めてから直後、熱い視線を背中に感じる。

振り向くと当たり前といえばそうだが、転校生が俺を睨んでいた。いきなり嫌われるってのはどうも……。

「ぎゃああああさくらんぼってよく考えたらあの時見られてたあ
ーっ！！！！」

やばい、今頃まずい現象に気がついてる。

「沙耶、後は任せた！」

「じゃあ貸し一って事で」

こういつ時は迅速に脱出するしかない。

俺は背中に当たる怒声を無視し、人がまばらの廊下を一気に駆け抜けた。

「ちょっと待てええええええ！！」

また変わり者な人間が、この学園には増えそつだ。

10月4日——フェイク&トゥルー

この街の住人は、やはりどこか潤っていたりする。別に肌がうるおってるとかいうおばさんの発想では無く、金銭的に豊かという意味だ。

それを決定付ける証拠、という程でも無いが、うちの学校にもやはり金持ちが多い。俺の家も決して貧乏なほうではない。ほとんどこの町から出ていない俺の基準だから、一般的には俺の家も十分金持ちで、俺の思う金持ちは大富豪なのかも知れないが。

この国は、世界はまだまだ広くて俺の知らない事が数多く存在しているのだから。

(さてと、指定されてるビルは……と)

で、その貧乏では無い俺が何故バイトをするのか。理由は、少し思う所があったってだけ。

まず第一にお金欲しい。家が裕福だろうが貧乏だろうが、働かない学生は親からの小遣いに頼るしかないわけで、今の金額では少々物足りないというのが現状。お金を欲しがらない学生というのも逆に珍しいだろうから、適切なバイトの理由だろう。でも、それ以上の理由がこれにはあった。

別に俺はバイトで無くとも良かった。それこそ、目新しいことならなんでも。自分の幅を広げられる行いなら。

それで変わる気がした……。だから、俺はこうしてバイトに挑もうとしているわけだ。

(混んでるな……)

人通りが圧倒的に増えていた。数か月前と比べても、目に見て違

う。駅前のほうまで行けば、歩くだけでも難儀しそうなほど人が溢れていた。日のあるうちでこれだから、帰宅ラッシュとなる夕方はもっとひどくなるだろう。

(…そういえばもう10月か)

この人混みが季節感と言っても、大半の人は疑問を浮かべるだろう。これはそう、この街特有の季節感であり風物詩だ。

10月と言えば、祭りの季節が近づいているという事を示す。人の出入りが激しくなり、街が人で溢れるのもこのせいだ。

街全体の祭りだから、その規模に合わせて準備期間も長い。駅前の掲示板にも、それを匂わせるバイト募集の張り紙がたくさん張り出されていた。

収穫祭短期アルバイト、ホールスタッフ、野外音楽ホールスタッフ、イベントスタッフ等々。自給や日給の額も見てみると、どれのなかなかの好待遇。裏を返せば、sonだだけきつい仕事内容だということだ。

きついのは構わない。どんな力仕事だってこなしてみせる。ただ、俺はもう面接の予約を入れてしまっていた。

「さてと、そろそろ時間か……」

俺は少しそれらのバイトに惹かれつつ、掲示板を後にした。

?
+?
+?
+?
+?

「つまりは、ネタ自体の面白さよりかは、ライターが面白がってる様子がこう……、読者に気力のように伝わる事が一番大事」

指定されたビルの中の編集部。その一室で俺はタウン誌の記者ライターのバイト面接を受けていた。この若い編集者さん（安西さんと言う）は、うちの学校のOBらしい。そのせいか、最初は緊張したものの今はいい感じな雰囲気面接が進行している。

「雰囲気重視…という感じですかね？」

「そうそう。ノリ重視って所かな」

で、このタウン誌というのがまた変わった雑誌で、学生の間で広がっている噂話、いわば都市伝説のようなものを掲載している物である。そして文面もかなり独特で、ブログみたいな雰囲気ライターが書いている感じ。安西さん曰く、内容も勿論大事だが、それよりライターが面白がってる様子が伝わるのが第一だと言う。

要は自分でネタを拾ってきてそれを記事にして提出する、という訳だ。それが採用されて雑誌に掲載されればバイト料ゲット！という訳だ。そういう内容のため、ガッツリ収入が入るようなバイトでは無いし、最悪ほぼ収入0なんて事も考えられる。

「じゃ面接はこれで終わりです。採用通知は…電話でいい？」

「はい、それで結構です」

「うん。じゃあお疲れ様でした」

編集者さんが立つのを確認してから、俺もパイプ椅子から立ち上がりドアのほうに足を進める。模範的な面接だったかはともかく、個人的な感覚としてはかなり順調な面接だったと思う。

これで採用されているなら万々歳なのだが…さて、結果が楽しみだ。

「まだ夕方か……」

暗くなるまでには、まだ多少の時間があるのだが、生憎する事と言えは何一つ心当たりが無い。中学生の頃は家に帰りたくないがため、ゲーセンで暇を潰すなんて事もそこそこしていたが、高校生となった今ではそんな事も無い。家に帰っても誰もいないからなだけかもしれないが。

オフィス街を眺めながら歩いていると、色々と思う事がある。

忙しく歩くリーマンに、屋内で手際よく仕事を捌いている公務員。ビルの上のほうにある巨大モニターに映る芸能人。そこから視線を横にスライドさせれば、数本のケーブルのような物で吊るされた台に乗って窓ふきをしている人。どれも大変そうだ。

俺にもいつか、こうして毎日働く日々が訪れるのだろうか。自分のために、それが誰かのために働く日が来るのだろうか。

それは遠い未来のようだが、ふと気付けば今など酸っぱい過去になっっているくらいに近い今な気がした。

時間は寝ていても、必死で走っていても、時計の針は1秒1分、カチツと歯車の噛み合う音を鳴らして止まる事なく確実に進んでいく。

それは過ぎ去ってほしくない今は過去に変わり遠く離れ、訪れたくない先がだんだんと今に近づいて来るという事。

それは変わる事の無い世の中のシステムであり、誰として改変することは出来ない絶対の決まりだろう。いくら過去に逃げようとしても、未来に先走ろうとしても、時の流れはその速さを変える事無く進んでいく。

無くした時間は取り戻す事は出来ないが、これから得る時間は何かを変える事が出来る。

無駄に過ごしてきた時間は取り戻せないが、何かを変えたいんだ。

「よし、それじゃあデジカメでも探すかな」

取材用のデジカメ。その類の道具、機材はがあると記事作りで便利だと教えられた。向こうのほうでも貸し出すとは言っていたが、自前の物を使っても問題無いと言う事らしい。それ以前に、いちいち買いに行くのも面倒だ。

そんなに高くなければ、先行投資として買っておくのもいいかもしれない。

「こうなったら手当たりしだい捜しまくるぞ！」

と、へそくりまで引き出して気合を入れたまではよかったのだが

……

「おい、兄ちゃん、待てや」

（いきなり……）

夢中で探していたためか、いつのまにか見知らぬ通りに迷い込んでしまっていた。しかも、ガラの悪い連中が多い。俺とは済んでる世界が違う人達だ。

「な、なんすか」

「……見ろや」

そして早速絡まれている今現在の状況。

正直、焦る。

「気合入った入れ墨っすね……」

男の顔には、炎の入れ墨が入っていた。それが蠟燭の小さな炎だったら怖くもが無いが、どちらかというと地獄の炎を連想させるような強烈な業火みたいな物だ。

今言った感想は、素直な気持ちだ。

「そつちじゃねえ。こいつらを見てくれ」

で、男は何で俺に話しかけてきたかと言えば、勧誘だ。

男は露店をやっていた。陳列台には、いろいろな商品が並べられている。その中にデジカメがあるのは幸運か、それとも不幸なのか。

「兄ちゃんはや、デジカメが欲しいってツラしてるぜ」

「当たってます…」

「しかも仕事かブログ…携帯カメラ以上のモノホン志向でフォトしたいと思っているな」

「はい」

凶星です。

「この機種はどうだい。安くするぜ」

男は陳列台に乗っている一つのデジカメを手にとって俺に突き出す。パッケはいかにも高価そうな雰囲気漂わせており、男との組み合わせも非常にマッチしている。

「値段は…？」

控え目な声で俺はそう尋ねると、男は嬉しそうにニヤリと笑う。逆にその笑みが怖い。

日常的に人を殺している人間の貌^{かお}。獲物を狩る狼のような表情だった。

「今ならお得なグッドプライス、5万円ポッキリだぜ」

「え…（俺の所持金を軽々上回っていた！）」

「どうだい。学生ローンも使えるぜ」

「い、いや……」

男がこちらに身を寄せてくると同じ距離を、俺は震える足を引きずりながら後ろに後ずさる。

その姿は、狩猟者に襲われている小さい小動物みたいで、さぞかし滑稽なんだろう。

「こんな値段じゃ二度とお目にかかれないぜ？」

「いや、ちよつと予算が…その…」

瞬間、背筋に電撃が走る。それは、このままではやられるという本能からの現象だった。

そんな事はおかまいなしに、男は俺に近づいてくる。このままだと、壁と挟まれて動こうにもどうしようもない。

逃げるなら…今しかない。そう思った。

「すみません！」

「お、おい、待てコラ…！」

背中に聞こえる怒声を無視して、俺は逃げるようにしてその場を全力で離れた。

あやうる中つ国あたりの悪質コピー商品を超ボツタプライスで売りつけられるところだった。

裏路地は超恐ろしい場所だと思った。これ以後は出入りを気をつけよう……

しばらく歩くと、また別の露店を発見。こちらの店主は先ほどの男と違ってニコニコと穏和そうだ。

陳列された商品にはデジカメが多い。正にここだと思った。

「デジカメいくらっすか」

「ひとつ1000円から」

「安！ 神の店！？」

正に俺が追い求めていた店、そのものだった！

「毎度ありがとうございます」

それにやはりと言うか当然と言うか、店主の人当たりもさっきの男より圧倒的に良い。常に低姿勢で思わずこちらも頭を下げたくなるような人柄だ。

心は八割方傾いていた。

「ちょい待ち」

「…何？」

突然、今時なチャライファッションに身を包んだ男が、路地の奥からやってきた。

俺より年上で、今時の若者という単語がぴったりだ。

その男は、陳列台のカメラを指差してこう言った。

「あんたそれさあ、パチモンだよ？」

「え？」

「外国製の品質の低い奴しかも違法コピー品」

そう言って今時の男は、カメラを一つ手にとってパッケの裏を見る。そこを軽く見た後、「これ見てみ？」と言い俺に手渡す。

言われた通りにそれを見ると、ものすごく小さな文字でこう書い

てあつた。

本製品は高級デズタル機をイメージしたツヨーク商品です（原文ママ）

何という注意書きのクオリティの低さ！

「ね」

「げー……」

手に取っていたカメラを、丁寧に（叩きつけたい所ではあるが）露天に戻す。

「見てくれだけは丁寧に作ってやんのな、これ。このあたりも怪しい連中が増えたもんだよな、オツチャン」

「な、何のことでしょう？」

「いいんだよ。こんなのだまされる方が悪いんだし」

笑いながら軽い口調で今時の男はそう言うと、唐突に俺の肩を叩きながら言った。

妙に馴れ馴れしい気がしたが、ここは合わせておいた方が身のためだと判断。

「ただこいつ、俺の知り合いだから、勘弁してやって」

「……いや、まあ……」

「サンキュー。んじゃ、商売頑張つてなー」

今時の男はそう言うと、露天の店主は微妙な表情をしながら商品をかき集めてすぐに立ち去ってしまった。

騙されかけたとはいえ、その手際の良さには尊敬の感情があつた。

10月4日——フェイク&トゥルー（後書き）

女の子が居なくて、特に面白みも華も無い錆びれた回。

10月4日——フリーマーケット

「まっとうなガクセーさんやってんだな」

今時の男は俺が自己紹介を軽くすると、そう一人で納得し始める。物珍しい目で俺を上から下までざっと眺めて頷く。確かにこんな所に制服来て迷い込むってのも珍しいかもしれないが、そこまで興味深いわけでもないだろう。吉野とかは制服のまま来ていてもおかしくなさそうな場所だ。

前に何かあったのだろうか。俺は、この人と。

「デジカメ探してるんなら、最初のタトゥーした奴の店がいいと思うよ?」

「え、マジですか?」

「マジマジ。あいつは好きでやってるから。ここフリマだから型落ちが多いけど、高級品の名機しか並べてないから」

って事は、5万って本当にポツキリお買い得価格! だったという事が……どの道そこまで予算はないのだが。人は見かけにはよらないものだ。見た目の姿が、その人の中身と決まってるわけじゃない。という事なのだろうか。俺はそこまで人の見極めが上手いわけでもないらしい。今だって相手がどんな人間なのか分かっていないのだ。この男のフレンドリーさが素から出てるものなのか、化けの仮面を被っているのかさえも曖昧だ。恐らく、分かる人には分かるのだろう。

「ってかフリマなのここ!？」

「一応ねえ……。客層がこんなだから、スラムっぽいと思われてるみたいけど」

と言って、自分を含めた路地の人間達を指す。その人達も知り合いのようで、少しだけ今時の男に目配せやら、軽く手を上げるやら、小さなアピールをする。

「ま、最近は見えた目は普通でも怪しい奴多いから、だまされないようにしたほうがいいと思うよ」

そこまで男は言うのと、俺に背を向けて路地の奥にチャラチャラと歩きはじめる。最後に「じゃ」という妙に親近臭い言葉と、バイビ―とでも言いそうな手草を見せて去っていった。

名前も聞けなかった。けど、どこか懐かしい感じがした。小学校以来の友達と出会った気分だった。でも、初対面のはずなのに何故そんな事を思うのだろうか。

帰路を歩きながら考えても、過去にあの男と出会ったという事実は思いだす事はできなかった。

？
＋？
＋？
＋？
＋？

「ふあああ……」

俺は帰宅し風呂に入り、夕食を済ました後の二時間。その後はとある漫画をベットに寝転げながら読むことにそれなりの時間没頭していた。時計を見ると時刻は既に日付が変わった事を示しており、時間の流れというのは恐ろしいものだと思えて実感する。時間というのは気付いた時には思っていたのより数倍の時間が流れている事もあれば、数分の一しか流れていたい事もある。基本的に前者ならば時間を有意義に、後者ならばだらだらと使ってる場合が多いだろう。そんな教訓を、過去に誰かに言われた。確かに言っている事は分かる、何となくなただけだが。でも、俺は真理までは読みとる事は出

来ていないだろう。理由として、今俺は前者と後者どちらに当てはまるかが分からないのだ。そんなのも判断できなくては、この教訓の意味が読み取れるわけがない。

「もうこんな時間か……」

今読んでいる『学園革命スクレボ』。名前からして推測はある程度出来るかもしれないが、よくある少年漫画という奴である。ただ漫画と言っても、既に連載終了している一昔前の古い漫画。何故俺の家にそんな物があるかというと、実の所よく分からない。いつぞや家を整理していた時に、数巻セットで発見したのだ。なんとなく、本当になんとなくなのだが、過去に誰かが持ちこんだ物な気がするのだ。身近にいる奴で一番確率が高そうなのは沙耶なのだが、生憎そんな珍しい事があつたら忘れないだろう。それこそ記憶を抜かれでもしなければ。

ストーリーはというと、どこにでもいそうな気弱な男子と、スパイ組織に所属する女の子がコンビを組み、学園の地下迷宮に眠る秘宝を求めて探検するというもの。そこには大小様々なトラップが仕掛けられており、二人はそれを協力しながら攻略してゆくという話。それには敵対する組織も係わっており、それとの銃あり近距離ありのバトルも魅力の一つだ。そして二人の関係も、徐々に進展してゆく……

と言つても、最終的にどうなるかは、俺はまだ知らない。でも、何故か俺は一度これを読んだか、もしくは誰かから話を聞いているような気がする。釣り針みたいなのうつつというしい物、外れそうでも中々取れない蟠りが頭の中で引っかかっていた。

「ふああ……」

そんな事をふかふかのベットの上で考えている、しかも時間はも

う寝てもいいだろうと思われる所。となると、人の体は何を欲するかは明確だ。特に今日は何だかんやで色々あった日。HPはそれなりに減少している。

「く、くそお……」

必死に抵抗。ダメだ、睡魔に負けては……。こんななんにも勝てなければ、先の強大な敵に勝てないぞ瑚太郎。俺はこれを超えなければ……。

ああ、でもだめだ……どんどん……目蓋……が……。

「……ガクッ」

と、抵抗空しく、気付いた時には完全に眠りについていた。

10月4日——フリーマーケット（後書き）

今回短いです。2000文字あるか無いか程の長さ。それと今回で10月4日は終わりです。

次からは他のキャラも動き出します、多分…。

10月5日 後ろの席に

「ふっ……これで終わりだ、天王寺瑚太郎」

男が冷たい声で俺に囁く。ノイズが入ったような不気味で、無機質な声。それと同時にゴリツと、額に金属の冷たい感触が押しつけられている。そう、拳銃だ。男が俺のおでこに、一般的に日本では所有を禁止されているはずの凶器を突き付けている。

撃った事も撃たれた事もないが、推測で物を言う。あの引き金にかかっている人差し指にちよつとでも力を入れれば、俺は一瞬でここからさようなら…なんだろうな。

「滑稽だな。まあ、所詮貴様は何も変える事の出来ない、役立たずだったという事だな」

「待て待て！ 話合えば分かるって……」

「それが最後の言葉か」

そう言つて、男はさらに深く拳銃を俺に突き付ける。これではもう、逃げる事はほぼ不可能。

ああ、俺の人生ってこんなもんだったのか……

「さらばだ、天王寺瑚太郎……！」

男が引き金にかかる人差し指に力を込める。それが完全に引かれれば、頭を鉄の弾丸が貫通し、俺はゲームオーバー——つまりは死である。

「や、やめてくれええええええ！！！！！」

顔を伏せて絶叫。我ながら中々の悲鳴だと思う。

まず思ったよりも乾いた音がする発砲音が一発分聞こえる。そして間入れず二発目の銃声。ああ、これは死んだな……そう思ったさ。でも、どこも痛くない。それか、死ぬって実は痛くないのか？ まあ体験したことはないわけだから、もしかしたら本当にそうなのかもしれない。

「……え？」

いや違った。それは、俺が撃たれてるんじゃないから。

俺の目の前に立っている男を見ると、胸には銃弾が二発突き抜けた跡。それこそ、風穴がぼっかりと空いていた。

「はい。これでジ・エンドね」

そして三発、四発、五発と、銃弾が再び発射された。気付いた時には既に、男は実体を失い、黒い粉のような粒子に拡散して消えていた。

「全く、何馬鹿やっているの？」

男を撃った張本人がいつのまにか姿を現していた。金髪の白いリボンの少女。完全無欠のスパイがそこにいた。愚痴を言いつつも、情けない事に尻餅についている俺に手をかざしてくる。何だかんだで心配だと思ってくれたのか。

「いやホント、マジで助か……ってえ？ 銃声！？」

何だ、また別の敵か？ でも彼女の銃口は俺のほうを向いたまま、少し焦げ臭い煙を漂わせている。いや、待てよ？ 俺のほうに銃口

が向いていて、そして撃った後の匂いがするって事は……

「って撃たれてるううう！！！！！！」

今度は俺に風穴が空いていた！

「馬鹿は必要ないのよ。だから、死んで」

意識が無くなる直前、そんな声が俺の耳に聞こえた……

ああ……俺って…情け…な……………

？＋？＋？＋？＋？

「うわあああああ！！！！！！」

ゆ、夢…………？ それともここは天国か？

回りを見渡す。窓には見慣れたブラインドに、外のベランダには小鳥のプチガーデニング。机の上には愛用のノートPC。

よし、ここは俺の家だ。って事は、さっきのは夢だ。

「あーこれのせいか…………」

で、何故あんな意味の分からない夢を見たか。原因はすぐに分かった。

昨日読みふけてた漫画が、頭に覆いかぶさっている状態で寝たいからだろう。どういう状態からこうなったのかは俺もよく覚えていないが、恐らく寝落ちだろう。今までになかったわけではないが、こう面白い（というのか）状況になった事は初めてだった。

「さて…………学校か」

背伸びして硬くなっている体をほぐす。夢では誰かから逃げるのに走り回ったり転んだりした気があるようなような。でも、結局は夢の話。現実の体には影響は及ぼさない。

「……え？」

体には及ぼさなくても、どうやら生活には大きく影響するようだ。

「ち、遅刻だあああああ！！！！！」

？＋？＋？＋？＋？

「うるせえ。静かにしやがれ」

腕を組んで椅子にふんぞり返っている吉野から、あいからわずの手痛いコメントを頂戴。いつもはここで切り返し、親しげな会話を二人で楽しむ所なのだが、今ばかりはご勘弁な状態だ。

慌てて制服に着替え、朝食も食わずに全力疾走。他人の家の庭を通り抜けながら、学校に行くまでの坂道までノンストップ。髪はぼさぼさ、体力メーターは八割方減少していた。

「ハア…ハア……」

運のいい事に、先生はまだ教室に来ていなかった。いつもならば一分と狂わず到着するのだが、何かあったのだろうか？ まあ、俺からすれば有難い限りなのだが。

「なあ、今日なんかあったのか？」

という事で、隣の吉野に質問してみる。

「……」

さっきのポーズに加え、目を閉じて頑なに黙っている。全く、素直じゃないな。

「なーよっしー。教えてくれよー」

ゆっさゆっさと、肩をゆすりながらもう一度質問。ガードは固いが、きつとこれも吉野なりのかまってほしいアピールなハズだ。朝の楽しいな会話を楽しみたいという。

「……転校生だ」

「え？」

「転校生だって言った。それと、二度とその呼び名を使うな。トルネード・ザ・タイフーンを喰らわすぞ」

「成程」

だそうです。それはまあ、先生が遅れるのも納得である。それと、それだと竜巻台風とかいう、意味の分からない言葉になるぞ。

「でもよ、俺、ソイツ昨日で会っちゃってるんだよなー」

このタイミングで転校生と言えば、昨日の騒がしいアイツしかない。えーと確か、名前は……鳳ちはやだったか。

……ただ、本人から聞いたわけではなく、沙耶の口から出た名前なのだが。まあ嫌われてるし。

「それがどうした？」

「何て言うかさ。そうだな、中タインパクトのある奴だったよ」

落ちてきたり、転がったり、大脱走したり、さくらんぼだったり。

「下らねえ……」

吉野は群れない狼だ。こういう事にはあまり関心がないのだろう。でも、回りはちゃんと把握している。それも、今日に限った事ではない。いつもそうだ。回りに群れなくとも、周りは見ている。吉野とはそういう奴だ。

「はいみなさん。席についてくださーい。始めますよー」

散々焦らして、ついに登場する担任。いつもどろりに振舞ってはいるが、それも先生なりの演出なのか。クラスの雰囲気はまだ見ぬ転校生のせいで浮足立っていた。

「それではここで、転校生を紹介しまーす。昨日一日期待させちゃいましたかー？ ではみんな、拍手で盛大にお迎え下さいね」

おおお…と教室だどよめく。感じ的には、コンサート前の雰囲気のようなものだ。

それに引かれてか、興味なさそうにしていた吉野も、この時ばかりは教室のドアに注目していた。

「じゃあ、転校生さん、どうぞー!!」

どよどよと、とさらに色めく教室内。みんなは胸の内にときめきとわくわくをたくさん秘めているのだろう。

そんな中静々入って来た転校生の鳳だが、あー顔知っていると新

鮮味が無いな……。ここに冷めた奴が一人……。いや、

「……………」

隣を見ると、机に突っ伏している奴一名。冷めてる組は二人目がいたようだ。

で、とうの転校生さんと言うと……

「……………」

表情こそ俺をピンポイントで睨んでおり、『げ』と今にも言いたそうだったが、特に声を出す事無く、教室の前、黒板の所にちょこんと立っていた。

数人はその視線の先が俺だという事に気づいているようで、『何で天王寺が？』という表情で俺の事を凝視していた。

「て、転校生の鳳ちはやです…よろしく…」

そしてこの、微妙にたどたどしい挨拶。なんか嫌悪感っぽいので、対応に困る。

俺と鳳の視線に気づいてない奴は、それを『緊張している』と解釈しているようで、『よつろしくー！』とノリノリだ。

正直な所、鳳の容姿は一般的な評価からしてもかなりランクが高い。

で、それが俺を何か睨んでいる（熱い視線とも取れなくはない）のだ。正直、あまり良い状況とは言えなかった。

と言っても、こんなのはあくまで爆発的で、一時的なものだ。上手くあしらっておけば勝手に自然消滅するもの。来週にもなればきっと平和になるはず……

「じゃ、席は…とりあえず、次の席替えまでは定番の一番後ろかしら」

前言撤回。しばらくは、俺に平穏な学園生活は訪れないようだった。

10月5日——後ろの席に（後書き）

ちはや転校回…なのはいいですが、主にあるのは吉野の絡みぐら
い。ここはあえて小鳥抜きで書いてみました。

最初の部分は何というか、思い付きです。

そろそろ他のヒロインも登場出来るハズ。

10月5日——脱出

「ふう……なんとか脱出出来たな」

俺は授業終了のチャイムというスタートのピストルが鳴るのと同じ時に、全速力で教室を抜けだした。理由はもちろん、鳳を中心とした転校生フィーバーに巻き込まれないためだ。

こんなになるくらいなら、木に引っかけたまま放っておけばよかった……と、今更ながらに思っても結局後の祭り、である。いや、助けたまではよかったが、その後がな……

嫌われるだけならばまだいいが、このままだと今後の生活に支障が出る。こういう時は小鳥に相談するのがいいと思うのだが……

「つつてもなあ……」

休み時間中に、小鳥がいる教室には戻れない。まあ後でつて手も無くはないが、小鳥は放課後あまり付き合ってくれない。となると、他の選択肢は……

> 沙耶に相談する

> 沙耶に泣き入る

> 沙耶に土下座してなんとかしてもらう

……ほぼ一托です。思った。やはり交友関係は大事だ。

?
+?
+?
+?

「——という訳なんだが」

「へえー。瑚太郎君、相変わらず厄介事に巻き込まれる体質ね」

原因の半分すこし多いくらいは、お前のせいなんだけどな。

「え？　なんか言っただ？」

「い、いいや」

結局俺は昼休み、沙耶を屋上に呼び、昼のパンを片手に話を聞いてもらっていた。こういう時には、何だかんだで沙耶は頼りになるのだ。

「寒つ……」

何故この場所かというと、大体いつもここだから、という以外には何もない。沙耶が妙にここを気にいつているのだ。

実際俺も好きだ。人はほとんど来ないし、街を一望でき、それに風も心地よい。まあこの季節は、風も肌寒くなってきたので、自分から行くことはほとんどないが。

「まあ放っておけば、ほとぼりもそのうち冷めるでしょ。はい、解決。これにて終了」

…こういう風に、足蹴にされる事もよくあるのが悩みどころなのだが。

「で、面白い事があるのよ。ちょっとこれ見て」
「ん？」

とまあ、完全にあっちペースなのは置いておいて…

沙耶が小さなメモ用紙を一枚、俺の前に差し出す。受けとって見てみると、そこには少々人に話すには事が書いてあった。

『校内怪しい奴リスト』

二年《灰色少年》天王寺瑚太郎に不審な点多し、背後関係はないに等しい？ 直接尋問が有効か

二年^{バグ}拳動不審、近頃起こった盗難事件に關係有？

入念な証拠探しが必要、洗いをかけるべし

一年《資料室の番人》まじない成功率100%の、謎の本

接近時はトリックを見破る場合でも、もしもの事を考え軽いまじないを注文すべき

「……」

何なんだ、このカオスなメモ用紙は……

しかも俺の事までしっかりと記入されてるし。それに何だよ、なんか筆跡が狂ったような書き方で怖い。死に際の被害者が残した、必死のダイニングメッセーじみたいな走り書き。

これを書いた奴は、狂気に満ち溢れているみたいだ…

「なあ、これって」

「どう？ 面白そうでしょう？ 前から気になってはいたんだけどね」

「灰色少年……とか？」

「何で瑚太郎君が知ってるのよ！」

沙耶が凄い勢いでこちらに接近し、叫んでくる。それもさっきまでパンを食っていたのだ。そのパンの破片が、唾と一緒にベチョベチョと俺の顔に飛び散る。

「お、おい！ やめろって！」

「あ、ごめん。顔に付いちゃった……大丈夫？」

「いや、大丈夫」

沙耶がハッと気付いて叫ぶのを止める。ポケットからハンカチを取り出して、俺の顔についた物体を拭き取ってくれた。拭き取ってくれたのはいいんだが…

「で、何で瑚太郎君が知ってるのよ!」

また同じことを呼び始めていた!（でも今度は口から何も飛んでは来ない）

「いや、このメモに書いてあ——」

全部言い終わらないうちに、沙耶が目止まらぬスピードで俺の手のなかにあるメモ用紙を引ったくっていった。それをくしゃくしゃに丸めて慌てて懷に隠しているのだが、今更持ってたかてもしっかり見てしまってるんだが。

「あ、いや、これはその、違うのよ。うん、違うったら違うの」

ものすごく言い訳をしているが、内容をもう少しなんとかしようぜと思うのは今日に限った事でないので、気にしないでおく。

「違うも何も、もう見ちゃったものはしょうが…」

「じゃあ忘れて。さっさと忘れて。今すぐ忘れて。はい、もう忘れた!」

「……」

だそうです。まあ忘れられるわけないのだが。とりあえずそういう事におかないと、色々と面倒そうだし。

「で、面白い事があるのよ。ちょっとこれ見て」
「ああ……」

また戻るのな……とデジャブを感じるが、それは心の中で勝手に突っ込んでおくとする。

再度メモ用紙が俺に差し出される。今度のは意外と綺麗な字。さっきの狂気じみたのではなく、きちんと箇条書きになっていて纏められている。とても見やすい。

見慣れた字。いままで見続けてきた、情報の資料の纏め方。これは紛れもなく沙耶の字だ。

「で、えーと……三年《千里朱音》通称《魔女》オカルト研究会の会長。単なる生徒の枠を越えている謎の人物。教師も魔女には逆らえない。謎の権力を持つ。後はえーと……上位ランカー？」

どうやらこれは、三年のとある生徒についてのメモらしい。魔女と書いてある辺り、女ではば間違いないだろう。上位ランカーとかいう、よく分からない表記もある。

「千里朱音。魔女って通り名くらいは知ってるわよね？」

「いや、知らないな……初めて聞いた」

「はあ……つたく、瑚太郎君の情報収集能力の低さには心底呆れるわ。貴方、本当にこの生徒？」

「ごもつとも。確かに情報少ないし、こういうのには疎い。」

それにしても、これが本当ならばとんでもない生徒である。魔女と命名されるのも頷ける。学校で可能な事ならば何ても出来る、みたいな感じであるし。

「で、これを俺に見せてどうするんだ？」

「決まってるでしょ。接触するのよ、この魔女と」

「そりゃまた何で」

「ちよつと用があるのよ」

それが何かって聞いているつもりなんだが……この調子だと、聞いた所で流されるのがオチだろう。

噛み合わないというか、因果横暴というか。質問という質問が全く通らない悩みを頭で考えている所に、爽やかな表情の沙耶が俺を見ていた。

「って事で、協力してね」

「まあ、面白そうだし…付き合うか」

というか、この状況でこの誘いを断るという事は、沙耶の機嫌を損ねる事になりかねない。そうなると後々面倒だ。ここは首を縦に振るのが先決。

まあ、どうせ他にやる事もないし、実際やってみると面白かったりするのでもいいのだが。

「じゃあいつもどおり、よろしくね」

「ああ」

という訳で、俺は新たなクエストに挑戦することになった。

10月5日——脱出（後書き）

オリジナルの展開です。原作の内容は所々カットしていますがご了承を。

沙耶中心となると、こういう展開がいいのかなーと思いついて。ただ小鳥の影が薄くなってしまっんですね…。難しい。

10月5日——始めの一步

「何だ、お前も知ってたのか？」

「そうだよ。ひそかな有名人だ」

人差し指を立てて、少し賢そうに俺に話す小鳥。正直、学校をそれなりに休んでる小鳥に、情報量で負ける俺は、相当鈍感なのだろうか？

「しらなかった」

午後の授業の合間に、昼休み沙耶からいわれた事を小鳥に話してみると（一枚目のメモの事は伏せてある）、意外な事にその千里朱音という人物は有名人…という事が判明した。沙耶の言ってた事は、罵りでも馬鹿にしてるわけでもなく、本当に誰でも知っている事だったようだ。

裏社会のドンだとか、学園の魔女だとか、色々を通り名はあるらしい。そして、一般的なその千里朱音の認識としては…

「恐怖されてる」

恐怖対象、との事。どうやら俺は、相当に世間知らずだったらしい。みんながそんなに感じている恐怖とやらなんて、知らないままの方が楽だったんじゃないか？

抱える物は、少ない事にこしたことはない。

「魔法とか超能力とか呪いとか霊とか、色々操れるみたいなの？」

両手をうねうねと動かし、空気の霊を机の上で動かす動作をして

みる。自分で言うのもアレだが、結構上手く出来ていると思う。こ
ういうのをパントマイムといったか。違う気もするが、まあなんと
なく雰囲気になってればそれでいいか。

「で、逆らうとどうなるんだ？」

「おそろべき魔法の力で…」

「ま、魔法の力で？」

妙に小鳥がノリノリになってきたので、俺も流れに乗って唾を飲
み込んだりして見る。こういう時は雰囲気作りがが大事だ。芸者に
魅了され、見とれる観客。そして、観客をいかに驚かそうかと工夫
する芸者。

どちらが欠けたら成り立たない。観客、芸者の、相互関係。それ
が小さくもここに現れていた。

「だいじなお札をハトにかえられちゃう。こわいつ」
「手品だ！」

だが、所詮はこの程度だった！

「あるいは、恐怖の超能力で…」
「超能力まで持ちだすか」

あまり期待はしないが、一応耳は傾けておく。超能力という響き
は嫌いじゃない。一応興味を注がれる。

「ミカン汁をかけるだけで割れる風船を見せつけられちゃう。どう
したらいいのっ」

「それ、ゴムが溶けてるだけだよ！ 小学生の科学実験だよ！」

結局この程度だった！

「しまいによ、水の入った桶に500円玉を入れさせられると、それが跡形もなく消える大イリュージョン！」

「それ錯覚！ 角度によつて見えなくなんだよ！ しかも500円地味にパクられてるよ！ 超能力なめんな！」

これは、期待した俺が馬鹿なのか。それとも、無駄に大げさに言う小鳥が悪いのか。

まあ実際、超能力という存在がこの世にある事自体には、俺は否定しないが。さすがに手品（それもガキでも知ってそうな）に騙されてなんかはどうしょうもない。

「ま、そういう感じ」

以上、小鳥先生の授業でした。

「で、何でまた調べよう？」

「理由は特に無いよ。沙耶にやれって言われちゃったから、やるしかないだろ」

その場合どうなるかは、小鳥もよく知っている。本気で怒られるって事はないだろうが、あまりいい状況には流れない。決して仲が悪くなるわけではないのだが。

「まーね。それだとしても、面倒事に自分から向かってくなんて、最近の瑚太郎君、やる気だねえ」

「まあね。色々あってさ」

そう俺がため息をしながら答えると、小鳥は何故かニヤニヤにな

がら俺の顔に視線を向けてきた。

何事かと目で返すと、その小さい口から少しばかり答えずらい質問が吐き出された。

「瑚太郎君、さーちゃんの事好きなの？」

「…え？」

「さーちゃんと、おつきあいしたいの？」

唐突にそんな事を聞かれると、さすがにすぐに言葉を返せない。

確かに好きだ。女の子としても綺麗だと思う。でも、恋愛感情を抱いた事は、多分ない。それに、俺は未だに踏ん切りが付いていないのだ。

すこし間を空けて、俺は返事を返す。

「まあ好きっちゃ好きだけど…恋愛的な要素はないぞ。だって沙耶だぞ？ 嫌いじゃないが、そういうのがあると思うか？」

「あるんじゃない？ だってホラ。幼馴染から始まる恋！ なんてよくあるじゃん」

「だったら俺は——」

とまで言った所で、言葉に詰まる。その時、俺の脳——記憶の奥にしまった、ザリツとした痛い記憶が、一瞬だけ蘇った。

忘れたい記憶。

鎮めたい記憶。

だけど、すぐに振り払う。けど離れない。むしろその記憶が鮮明に、よりクリアになって蘇る。整理なんて全然ついてない。時間が解決してくれる、そう自分に言い訳していた。

だから、俺もこんな事をつい言ってしまう。

「やろうぜ、一緒に」

「いいよ。でも、さーちゃんはいいの？」

いいに決まってる。小鳥を遊びに誘って何が悪いのか。いたって自然だ。いつもどおり。そう、いつもどおり、昔からずっと同じ。

「いいじゃんか、三人でやれば。いつもそうだろ？」

でも、だったら何で、俺は一瞬何かに引っかかるんだろうか？
それが何かは分からない。分からないんだ…いつもどおり、ずっと続けてきた事なのに。

「うん。いいよ。瑚太郎君がやりたいと思うなら、やればいいと思うの」

「何言ってるんだ。いつも仕切ってるのは沙耶だろ？」

「そう？ 最近の瑚太郎君、なんか違う。前よりずっと、自分で動いてる。きつとやる気なんだと思うよ」

最近思う。それだけで俺は変わるのだろうか。そして取り戻せるんだろうか。失ってしまった時間を。過ぎていつてしまった、青春を。

「…まあな」

誰かが無条件でそばにいてくれる。でも、それは自分で持っている事にはならない。持たされているだけ。子供と同じ。俺は恵まれていたんだ。でも、それは何かを持っている事にはならない。俺は支えられている。

「うん。協力する」

だから、俺は自力で歩いていかなければならないんだ。

「…サンキュ」

いつまでもこのままでは駄目なんだ。

「瑚太郎君、どうしたの？」

「あ、ああ、何でもない。よしっ！」

だから、俺はやると決めた。きっとこれは、この先への第一歩になる。

やり直す。そして、全てうまくやってみせる。前だけを見つめて、進んでいく。

「そんじゃ、沙耶の所に行こうぜ。待たせて良い事ないしな」

「確かに。怒らしちゃうと大変だもんね。それじゃ、行こう」

俺は、書き換える事ができるのだろうか。その——運命を。

10月5日——始めの一步（後書き）

このタイミングでこんな事を書いてしまった。
でも、これ書かないとRewriteじゃないだろうと思ったの
で。

10月5日——調査開始

「はろー」

「…何でいるのよ。どうしてよ。そもそも、私誘ってなんて頼んだ覚えはないし…それに……」

小鳥の和みボイスの傍らで、沙耶は頭を抱えて、廊下の壁に正面を向けながら一人でぶつぶつと、何か愚痴のようなのをぼやいていた。正直、傍目から見ているとなんか怖い…

「コタさんやい。どうする?」

「まあ大丈夫だろ」

仕方がないのでしばらく放置していると、突然何事もなかったかのように髪をフワリと浮かせながらこちらに振り返り、小鳥を含め本日の行動内容を説明し始めた。

「仕方がないわね……全く」

結局、小鳥の参加は認めてくれるようだ。まあ心配しなくともこの期に及んで、沙耶が断ると思えなかったが。

「それじゃあ、今回のクエストについて説明するわ」

「……ああ。とりあえずは、この学校にいるらしい魔女を探すんだろ?」

一応補足しておくが、魔女というのが今回の標的であり、調査対象。その名は千里朱音。学園の魔女と恐れられている、謎の存在。現オカルト研究会会長でもある。何故沙耶が探したがつてるのかは、

分からないのだが。

「そうね。まあ、最初は正方法で行くことにするわ」

そんな人物に合うための正方法とは、分かりやすくそして最も単純な方法。

今の時間帯は学生のテンションが跳ね上がる放課後。となれば、千里朱音に一番接触出来る可能性がある場所は、

「部室……か」

「ええ、そうよ。オカルト研究会。略してオカ研の活動場所。ここが今回の第一目標よ」

順当に行けばそうなる。単純な話だ。部活動の人間と接触したければ、その活動場所に行く。正方法であり、一番簡単。

だが、時にはその方法も、一気に難易度が高くなる可能性もあるのだ。

「でもさーちゃん。さっきこのサイト見てみたんだけどね。オカ研って部活コーナーにも登録されてないみたい。部室なんてあるのかな？」

「そう、そこなのよ。私も調べたけど不明なのよ」

目標はunk^{アウノウン}nown。未確認、という事か。

となると、このクエストは、中々の癖物になる予感がある。部室に行けばいいといっても、その場所が不明ならば、どうしようもないからだ。

「それに私は、部活の登録も曖昧なオカ研が、教室なんか借りる力持っていないと思うのよね」

「確かに。となると…空き教室か？」

「でもうちの学校、使われてない教室って鍵かけられちゃうんだよね。だから研究会って、何かヤラシテルと思うね、あたしゃー」

「口封じ、もみ消し、買収とかかしら？ 全く、魔女もよくやるわ」

成程。確かに魔女というお方が会長のオ力研だ…って、学生の身分でそこまで出来るもんなのか？

「となると、鍵がかかってない教室…全部洗うしかないわね。中々に骨が折れるけど」

普通に考えれば、高校の校舎一つを片っ端から探していった所でどんな大きい学校でもそんな時間はかからないだろう。ましてや大学とドッキングしているような学校でもないのだ。

だが、うち——風祭高校は、想像を絶するほどの敷地を持つマンモス校。それに比例して生徒数も多い…というならばいいのだが、何故か生徒数は並。となれば、無駄に空き教室が増えていくというわけ。

「それじゃあ行こうぜ！」

「そうね。さーて、どこから潰してやろうかしら…」

沙耶が銃に弾を装填しながら、不敵に微笑む。
エアガン

いや、確かに結構な作業かもしれないが、銃はさすがにないだろう銃は。どこにそんなのぶっ放す敵がでてくるんだよ。

「がつてん、あんさん！…って、二人とも、やけにやる気あるからね」

と小鳥は言うが、貴女もかなりノリノリです。

「それじゃ、まずは一年フロアからだな」

そんなこんなで、馬鹿三人による校内探索が始まった。

？＋？＋？＋？

「ねえ、ここ。ここ怪しくない？」

俺達は、校内をうろつき回った。

「いや、何もないわね…次の部屋行くわよ！」

教室という教室を調べ抜いた。

「くそつ、ここも駄目か…次！」

それは地獄の道行きだった。

「ここもダメだあ……」

終わりの見えぬ苦行だった。

「ここも無し……そろそろじゃない？」

隅から隅まで探した。

「…うう」

はい、結局だめでした。見つかりませんでした。

気力という気力をそがれ、青ざめた顔で、うめきながら校内を練り歩く俺達は、まさにこの世に具現化したゾンビだった。

誰もが俺達の前に道を譲った。

中にはアーメンと、手で切って十字架をかける者もいた。無駄だ。俺達にそんなものは効かない。無効属性だ。

「えーと、瑚太郎君。校内どれくらい回った…？」

どれだけ歩き続けたのだろう。俺は沙耶に聞かれ、起動しておいたマッピィを確認する。

「…あ、コンプリートだ沙耶。オールクリア…」

気がつけば、校内を完全制覇していた。

そしてあますは、俺達の目の前に広がる最後の一区間のみとなった。

「このあたり、なんかオカルトっぽいな」

寂れた感じの一画。校舎のはじっこにあり、使用されている部屋がないため、生徒も教師の姿もない。そのせいか、照明も消してある。

「言われてみれば、そのような印象もなきにしもあらずだね」

「そして、空き教室もあるわ…」

「任務完了のにおいがプンプンするね」

「だな。よし、確かめてみよう」

入口に手をかける。開かない。

「そりゃ鍵くらいかかってるか」

二度三度引いてみるが、扉は動かない。

「ちょっと貸してみなさいよ」

「お、おい。ちょっと待ってっ！」

沙耶が急に俺の隣に回りこんだかと思うと、扉を思いっきり引き始める。止めようと沙耶の手を引き剥がそうとすると、突然抵抗していた力がすつと抜け、行き場を無くした力が後ろに流れる。

「え…？」

そして気付いた時には俺は倒れ、その上には沙耶が思いっきり倒れこんで来ていた。

…どういう形でそうなったのか、俺の視界には沙耶の顔。どうやら俺がのしかかられる形になってしまったようだ。

「痛てえ…」

「だ、大丈夫!？」

思いつきり、沙耶の体重と共に床に叩きつけられたせいか、背中がずきずきと痛む。三日くらい痛みが消えなさそうだ。

「ん？ 何だこれ…」

気付くと、右手によく分からない柔らかい感触があった。俺の手だと掴めきれない程の大きさ。ちよつと力を入れてみると、柔らかい感触と共に、妙に弾力があり、すぐに元の大きさに戻った。

その瞬間、俺は死を覚悟した。

10月5日——調査開始（後書き）

最後…ですか？ ノーコメントで（笑）

オリジナル、原作、3：7くらいですかねこれだと。ちょっと雰
囲気崩れてないか心配です…

10月5日——謎の部室

「……くん。……ろう君。瑚太郎君」

「ん……」

俺を揺する優しい声で目を開ける。電灯の灯りが目に眩しい。天井だ。それも、見慣れない、妙な高級感を感じさせる天井。となると、俺は上を向いている事になる。

「何だ……ここは？」

「えーとね、探してた才力研の部室だよ」

どうやら俺を起こしてくれたのは小鳥のようだ。ちょっと心配そうな笑いが半分、失笑といった感じの笑いが半分。そんな笑い方をしているように見えた。

「ここが？」

そういえば、俺は才力研の部室を探していたんだった。目が慣れてくると同時に、段々と寝ぼけから覚めてきたようで、さっきまで何をやっていたかを思い出す。

学校を端から端へとゾンビのように渡り歩き、人という人に話を聞き……そうだ、怪しい部屋の一画までた度地着いたんだった。

そこからは記憶がない……薄ら覚えているいえば、『絶対に死ぬ』という感情。

「ちつくしよう。それにしても嫌な夢見たぜ」

「どんなの見たの？」

「えーと、なんとなくなんだが……銃で撃たれた」

何故か分からないが、俺は床に背中を着けて倒れていた。そう、丁度今寝てるみたいな体制。そういうシチュエーションで夢は始まったのだ。

そしたら、自分を見下ろしてる奴が一人。そいつが俺に向けて銃を向けたかと思うと、突然連射。頭から足の先まで、有無も言う事も許さないままに、俺はそのまま蜂の巣にされた…というわけだ。なんか夢だったわりには、体全身が痛むのは気のせいかな。

「あ、ああ。そりゃ災難だったねえ…」

「ホントだよ。で、そもそも俺って何でぶっ倒れてたんだ？」

体を起こしながら聞いてみる。そしたら、なんか裏返った声で小鸟が言った。

「い、いやー別に何にもないよ！」

何故か顔が引きつってるし、若干額に雫が見える気もするのがあるのだが。

…まあ、気のせいだと思いたい。

「起きた？」

部屋の中を物色していた沙耶が俺に気付いたようで、こっちに寄って来た。

「全く、気分悪いぜ…」

「まあ、そんな事やられたら、気分もクソも無いわよね。夢の事だったら、さっさと忘れるに限るわ」

「ああ、そうするよ。ところで、一体ここはどうなったんだ？」

見渡す限り、どこか別施設に入り込んでしまったのかという有様だ。大量の蔵書、社長が座っていそうなデスクにある最新PCを始め、冷蔵庫、加湿器、俺が寝ていたソファベット、さらにはプレジデントチェアー（誰かが座った形跡有）までもが配備されている。そして窓という窓は黒一色のカーテンで覆われており、天井を見れば教室に設置されているのとは明らかに性能違いなエアコンまで実はここ、理事長室です！　と言われても余裕で信じられる。

「見れば分かると思うけど、明らかに学校に必要なものばかり。成金丸出しの部屋ね。しかも、壁は防音、奥にはトイレに風呂まであるわ」

「みたいだな……」

本来の教室ならば準備室スペースになっているハズの部屋は、完全に生活エリアになっている。

まさによりどりみどりだ。

「でも、何でもここが部室だって分かるんだ？　悪いが、なんとなくとか言われても、俺は信じないぞ？」

「分かってるわよ。私だってここが弱小部の部室です！　なんて言われて信じるほど馬鹿じゃないわよ」

そう沙耶は鼻を鳴らしながら言うと、本棚の本を一冊引き抜き、俺目掛けて山なりに投げてきた。

受け取って見てみると、紫やら黒やらを基調とした黒々しい表紙には、こんな事が書いてあった。

「えーと、《黒魔術の神秘に迫る！》……？」

中を開いて、数ページ適当にめくってみる。ずらりと書かれているその内容は、とても俺の口からは言いたくない。感想と言われてもなんとも言えないが、あえてコメントするとすれば……

「何この痛い本。というか、書物？」

これくらいだった。

「とまあ、似たような本が棚には大量にあるわけ。結構年季入ったのもあったわよ。それに、それ見てみなさい」

「それ……？」

本を閉じたところで、沙耶が部屋の隅に置いてあるダンボールを指差す。蓋があらさまに先ほど覗いたように開いていた。俺も覗いてみると、そこにはカプラ（カップ麺）が大量に入っていた。こんな物をカートン買いしてストックしておくなど、いかにも高校生がやりそうなこと。

「なるほど。ここは部室だな」

「でしょ？ まあ、研究会風情の部屋だとは信じがたいけど。事実みたいだし」

確かに。ここがオカ研部室という強い可能性は、二点ほど品を見せてもらっただけで、不思議と納得できてしまった。

「で、ここが部室なのは分かったが、肝心の《魔女》ってのは？」

「それがねえ、どうやら今日はいないみたいなんだよ。でも、出入りはしてるはずだよ。ちゃんと女の匂いがする」

「匂い……って事が、この甘いのがそうか？」

「これは、シャンプーとかソープの匂い。それとは別に、ちゃんと

女っばい」

何が違うんだ…？ 全然分からん。

「も、もっと詳しく教えてくれ…ぜひ嗅ぎたい」

「瑚太郎君には分からないわよ」

沙耶にぴしやりと宣言される。うむ、やはり女って生き物はよく分からない。趣味も、匂いも、行動原理も。

「くんかくんか」

「だからって普通、嗅ぎ回るもん？ 飽きる……。まあ、一応ここに巢食う奴がいるってのが分かってだけ、良い収穫だったと思うかしら」

「そうだねー。ただ、見つけちゃってよかったのかな？ ここ」

小鳥がよからぬ危険性を暗示するような事をなんとなく言う。

この部屋は、言いかえれば魔女の領域なのだから、確かに危険だったかもしれない。噂のような所業が、本当に出来るならば、だが。

「じゃあ、撤退しましょうか。もう日も沈んできている事だし」

「そうしようぜ」

「あ、だったらメモでも残しておこうよ。すぐ連絡くださいって書いてさ」

小鳥が卓上のメモパットを指差して言う。俺もそれに同意した。たし、沙耶もそうらしい。俺はペンを取り、メモパットの一番上の紙に黒いインクでこう刻んだ。

『学園の魔女を探しているのですが、もし貴方そうであつたら連絡

が欲しいです』

「あ、それとカギ壊してごめんなさいって書いておいて」

「カギ…？ そんなもん、いつ壊したっけか？」

「あ、ああ。瑚太郎君が寝てる時につい壊しちゃったのよ。ボボーン！ ってね」

「まあ、一緒に書いておくよ」

ボボーン！ で何故鍵が壊れるのかはよく分からないが…『それと、カギを壊してしまったことを、お詫び申し上げます』と書いておいた。

「もの壊しちゃって、短気な人じゃないといいけど」

「普通、神秘的なお姉さんってのは癒し系だ」

「こんな悪趣味な部屋に巢食う魔女が、そうだと思う？」

……確かに。自分が壊したわけではないとおもуг、少し怖くなってきた。

「あ、ヤバい。このままだと校門絞められるわよ。早く行きましょ」

「ああ」

ドアを開けて廊下に出る前に、今一度部屋の中を見回す。

やはり、この部屋はハンパじゃない。俺の直観だが、なーんかでつかい秘密を隠してそうだと思う。

それがどんな物なのかはさっぱりだが、こういう時の勘というのは、案外当たる物。意識はしておこうと思った。

「ほらー電気消しまうよー」

「はいはい。ほら、さっさと行くわよ、瑚太郎君」

「あいあい」

俺は明かりが消え、完全に真っ暗闇になった部屋を確認して、力ギの壊れているドアをそつと閉めた。

さて、はたして魔女は俺達の前に現れるのだろうか……？

10月5日——暗闇に潜む恐怖

今夜もひとり、広い家で過ごしている。

両親は仕事の都合で、何週間も家には帰ってない。それも、今に限ったことというわけではない。ほぼ大体がそんな感じだ。仕事が忙しいのか、家にいたくないのか。その真理は分からない。

擬似的なひとり暮らしはなかなか楽しいものだ。ただ最近、少々困った問題が発生していた。

「戸締りよし、と」

家中のドアや窓を完全に施錠する。どこも漏れる事なく、完璧。これで防備は万全だ。

そう、万全だ。物理的な方面には。

「……」

とりあえずベットに入る。本当は電気も消したくないところだ。明るいままにしておきたい。だが、いくら俺でも、消灯しないことにはとても眠れない。こないだのように寝落ちするならそれでもいいのだが、改まって寝ようとする場合は無理。

室内を暗闇が覆った。外の街灯と月の明かりがカーテンの隙間から漏れてくる以外は、完全に闇。

ふとんを頭までかぶる。でも、すぐに怖くなる。

「っ！」

充電器を付けていた携帯を布団に引き入れ、電話帳から一人の名前を選択。そして通話。沙耶ならこの時間でも大概は起きている。

電話は20回いかないくらいのコールで繋がった。

「もしもし！？ 愛してるさ……」

『うらあああああああ！ ぶっ殺すぞおんどりやあああああああ！』

こちらが渾身の冗談と共に話しかける前に、沙耶の叫び声と銃弾を連射音らしきものが耳に飛び込んできた。

防御態勢を取る間もなく、その大音量に耳がキーンとなった。

「あーもしもし、さ……」

携帯を耳から少し距離を置いて、改めて声をかける。すると、今度はそれなりにまともな対応をされる。

「はい、朱鷺戸です！ この忙しい時に何の用よ……って、また攻め込んできたわね。今度こそ逃がさないわよ、あの野郎！」

「あ、ああ」

どうやらご趣味のオンラインFPS（正式名称はFirst Person Shooter）の真っ最中らしい。FPSというのは、一人称視点のシューティングゲームの事を指すらしい。もっとも、それ以上の知識は俺にはないが。

『1ゲーム終了……さて、次にどう料理してやろうかしら……』

「夜中だつてのに大変だな」

沙耶はいつもこんな感じといえばそうだが、今日はいつもに増してかなりご乱心な様子。最近よく会つかいいうプレイヤーとでも激戦を繰り広げているのだろうか。

『大変も何も、ランキング落とされてるのよ。たまったもんじゃないわ』

「へえ……」

沙耶のやっているゲームには、プレイヤー毎にスコアのような物が設定されているらしく、成績によるランキングがあるらしい。勿論、勝てばスコアは増えるし、負ければ減る。だから遊びといえど、負けられない戦いがそこにある！　なんて熱く言っていた。

『瑚太郎君もやってみたら？　私が特訓してあげる』

「いや、俺はいいよ。なんか酔いそうだし」

『はあ……』

沙耶が突然、俺に対して大きくため息を漏らす。

『飽きれるわね。視野を広げるのも、色々と新しい発見あるわよ？　同じ世界に閉じこもってちゃ、いつまでたっても同じ事の繰り返しなんだから。ゲームだって、どうしてもよさそうな事でもね。それに、センスだって瑚太郎君にはあるはずよ、きっと。それに……』

「視野を広げる、か」

確かにそれは大事な事かもしれない。特に今の俺にとっては。

何か変われるチャンスみたいなものが、それで見つかるかもしれない。

『…あ、ゴメン。話しすぎたわね』

「そうでもないよ。いい助言ありがとな」

『いや、そんないい事言ったつもりないんだけど……まあいいわ。さて、次のゲームこそアイツを殺ってやるわよ』

携帯越しに、普段もよく聞く（ってのはおかしいんだろうか）銃のリード音が聞こえてくる。この音はA-T型の銃。現実で使用する銃と同型だろう。

どうも沙耶はこの銃に思い入れがあるのか、現実でも妙に執着している。俺も借りる時はこれがいい感じに手になじむ。

「んじゃ、俺も寝るか。悪いな、電話して」

『まあ、丁度ゲームの間だったから許してあげるわ』

「あつそ。んじゃ、切るな」

『あ、ちよつと待って』

と、電話を切ろうとした所で、沙耶が声をかけてきた。さっきまでのハイテンションな声質とは違い、結構控え目な乙女な声……なんて言ったら、きっと沙耶は怒るだろうが、可愛い声だ。

『その…今日のアレは、やりすぎたわ。ごめんなさい』

「悪かった…何がだ？」

『知らないならいいわよ。それじゃあ、お休み』

「あ」

そう一方的に言われるだけ言われ、電話が切られた。

今日のアレ…とは、一体何の事だろうか。明日小鳥にでも聞いてみるか。

人と話した事で、恐怖もだいぶ軽減された。このまますんなりと眠れそうだ。睡魔が優しく俺を抱きしめていた。

比喻なんかじゃなく実際に、そんな感触があったりもした。

「……え？」

つまりその…女性に抱きしめられているような…

「まさかな……」

夢に違いない。

そう、夢。非現実。空想。ドリーム。

睡魔は、ちよつとむせるような体臭がしていた。臭いとか、甘い匂いとかじゃない。例えるなら、濃度高めの森林浴といった所か。心地よさそうな表現だが、自然の臭いは強すぎると、逆に気分が悪くなる。

どうして、そんな臭いを感じるんだ？

「……いや」

いくら何でも、まさか。まさか、な。そんなわけはないだろう。ほとんど眠りかけていたが、どうにも離れない一抹の不安とともに目を開く。

「……………え？」

黒衣に包まれた白い髪の方が、ベットの中に入り込んできて、俺の上にのしかかっていた。

10月5日——暗闇に潜む恐怖（後書き）

10月5日パートは、これにて終了。オリジナルはちょいちょい入ったからこれでいいのか悪いのか…。原作の流れを保っていきたいのはそうなのですが、やはり2次小説っぽさが足りない気がします。

ともかく、次からは6日が始まります。

10月6日——昼時とフーキン

「昨夜って」

何かあった気がする。とても…とても恐ろしい何かが。

「それ、思い出さない方がいいと思うぞ」

と、心の中の俺が言っている。のだが、無意識にも意識してしま
う。

…霊。そのことについて考えるだけで、背筋が冷え、ぞくりとし
た。朝から気分は優れないなんてもんじゃない。最悪だ。

「やめやめ…」

夢だ。夢だと念じる。

そう、夢に決まっている……

「……」

自分の手を見る。見た所で何もありませんが、目に見えない何
かがそこには残っていた。

俺は実際に肌で、目で、感じた。というか感じてしまった。五感
ではつきり。というか、この場合第六感なんじゃないか？ もし本
当に霊なら、きっとそうなるだろう。

「さて…支度するか」

いち早く昨夜の事は忘れよう。

俺はそうずっと念じながら、学校の支度を始めた。

？＋？＋？＋？＋？

昼休みが終わると共に席を発つ。

「さてと」

昼休みは戦いだ。早く到達した者が勝利の晩餐を嗜み、遅れたものは余り物を悔しさと共に噛みしめる。この時間だけ食堂は力だけが絶対の狩り場となり、学生は喰^{しょく}に飢える狩獵者^{ハンター}となる。

「さてと、少し急ぐか」

慌ただしく話す声が飛び交う廊下を早足で進む。家の学校は無駄に広いと思えない廊下を持っているので、昼休みであろうと人が邪魔で歩きづらい。という事には滅多にならない。おかげでスムーズに移動する事が可能だ。そうなってしまうとどうしても、足がどんどん軽くなって歩調も上がっていつてしまう。

「ん？」

そして丁度角を曲がった所で、その足取りを警告するかのようには背後から笛の音。ただし、よく体育の時間の校庭から聞こえてくるような音ではなく、『ぶぴー』という調子の外れた音。

しばらく間を開けて、今度は『ぶす——』とかすれた音。力が抜けるような音である。

「……」

……振り返ってみれば、俺の肩までもない、ちっこい女子が立っていた。

膝くらいまでの長さがあるツインテール、眼帯、雰囲気が何か違うと、色々特徴的なパーツがそろっているその姿は、すぐにそれと分かる印象深さ。だからといって可愛くないかということそうでもない風貌。

ちなみに、俺の顔見知りである。

「むむ……」

その顔見知りは一言呻くと、すう、と精一杯息を吸い込んで、それを勢いよく笛に吐き出した。

笛というのは、あまり思いつきり息を吐くと上手くならない物だ。さらに先ほどから聞こえている笛の音からして、それ以外にも原因があると思われる。となると、高い音を出すはずの笛が本来の役目を果たすわけもなく……『ぷひゅー』と、一番情けない音が微かに廊下に響いた。

「……？」

無言で首を傾げながら、笛をとんとんと叩く。やはり俺の予想は当たったようで、壊れているのか、笛のほうにも原因があるらしい。

声を掛けることは簡単だが……敢えて無視してみたらどうなるだろう。

ちょっとした好奇心で、気づかない振りをして立ち去る事にする。

「……！」

『ぷす——』『ぷひゅぷひゅ』『ぷすっ！』『ぷすっ！』『ぷす』

「っ！！」

色々な音を笛は奏でるが、どれも拍子抜けな音ばかり。

……どうやら大慌てで一生懸命笛を吹こうとしているようだ。必死なのがちょっと可愛い。

「……」

いったいどうしちゃったんだ、お前は……という悲壮感溢れる表情で笛を見つめていた。

さすがに放置するのも可哀想になってきたので、

「えーと……何をしてるんだいお嬢さん」

と、紳士的に声を掛けてみた。

「むう……」

見れば分かるが、やはり笛が鳴らなくて困っているらしい。

「見せてみな」

「……」

ちょっと待った、と手でびしつと示し、水道場へ向かう。

小さい手で蛇口を捻り、『じゃぱー』と笛に水を流す。洗うにしても蛇口全開の量では多すぎるようで、水がはじき返って自分にかかっている。

成程……鳴らない理由が分かった。

「……」

自分にかかる事にはあまり気にしてないようで、ポケットから取り出したハンカチで軽く服を拭いた後、笛の水も拭き取って、俺にはいと手渡した。

受け取ってみる。よく球技なんかで審判が使うような、金属製のホイッスル。

見ると、当然中に水がたまっている。これじゃまともに鳴らないのは当たり前だ。

「いいかい、お嬢さん。清潔にするのは結構だが、中に水がたまってるじゃまともに鳴りやしない。これ、さっき使う前にも一回洗ったんじゃないかい？」

「……！」

そう促してみると、おおっ…目から鱗だ…という表情をする顔見知り。

ひとまず、中の水を振り切ってから返却。手で受け取ったまま口に運び、息を吸い込む。

「お〜」

すると、今度は高くよく響く音を、笛が高らかに奏でた。それはいいのだが、何故か俺を指さしながら顔見知りは笛を鳴らしていた。

「警告。ろーかを走ってはいけない」

どうやら本題に戻ったようだ。

因みに、今日出会ってから初めて、まともに喋った。

「ん…まあ、確かに走ってたけど…」

「ろーかをはしってはいけません、と生徒手帳にも書かれている」

言い訳の余地はないらしく、はっきりと二度目の警告。

「何でまたそんな警告を」

「私はフーキンだ」

なんかそれだと外国人のようだ。

正しくはフーキインです。と、心の中でツッコミをいれておく。

「なるほど。お名前は」

自分の役職を言ってきたので、名前を聞いてみた。要は自己紹介をつて事。

「静流だ」

「身長は？」

「……」

無言のまま、1、4、9と両手で表す。

「体重」

「……」

3、9と両手で表す。

「スリーサイズ」

「むむむ……」

真剣に考え込む。

「いや、わからないならいい」

実に素直な子である。

「……」

ちよつと残念そうに肩を落とす。答えられなかったのが残念らしい。

「ちなみにそういうことを女の子が答えなくてもいいんだぞ」

このままだとちよつと心配なので、そう一つアドバイスしておく。すると、なにい、そーなのかー、とうんうんと頷きながら納得する。こんな感じに、時折遭遇しては何か俺にちよつかいを掛けてくるのが、この中津静流という一年生。俺の後輩だ。

最初はなんかの会議で一緒だった事が出会いだったと思う。

確か、小鳥の代理で行った委員会だった。そのときになんか気に入られたらしい。

眼帯をした姿を始め、その特徴的な静流は、俺にしては珍しく顔もすぐに覚えられた。

…なんで眼帯をつけてるのは聞いたことがないけど。ずっとつけてる辺り、多分何か病気かなんかで目が悪いとか、そういうのだろう。

俺はそういうのは深く詮索しないことにしている。誰だって一つや二つ、聞かれないことがあるものだ。

「で、そんな静流さんが何の用だい」

こいつを相手にしている時の俺は、なんだかお兄さんっぽい。ちよつと自覚はあるが、そういうTOPなんだろ。年下好きとか、

そついうのとは少し違う感じだ。自分で思ってる中では。

「……」

おおつ、そうだった、と手をぽんと叩く。本来の目的を忘れて何やってるんだという感じだが。

「コタロー」

ちなみに静流は最初に名乗った名前を律儀に呼び続けている。そのほうが気楽だから、とは言ったが、本人にとって先輩とか後輩とかはあまり関係がないらしい。

先輩とか呼ばれてみたい……っていう気は、なくはないが。

「で、なんでしょ」

「ろーかを走ってはいけない。『ろーかを走っていきません』と生徒手帳にも書かれてる」

さっきの言葉を繰り返す。そんな大事なことなのかと思う。

でも、残念ながらこのまま引き下がるつもりはない。俺はフーキンに反撃に出る。

「何ページに？」

「……」

ふふん、仕方ないな、とばかりに風紀という名のを振りかざすには必須だろう、生徒手帳をポケットから引っ張り出す。そしてぱらぱらとめくり始める。

「……」

曇った表情をしてから、もう一度最初からめくる。それでも納得がいかないようで、二度三度と必死にめくっている。

「あの子……多分、そんな記述はどこにもないと思うんだわ」
「……！」

なんということだ……という表情で目を見開く。
小学生じゃあるまいし、『廊下を走る事を禁ずる』なんていちい校則で定めたりはしない。

「決めゼリフが……」

そして、しょんぼりうなだれる。

他の風紀委員がやってたことを真似てるんだろうか……。きっと一番かっこいいせりふとして認識していたのだろう。もう少しマシなせりふもあつただろうに、とか思っていますが、そこは触れないでおく。

正直、静流は風紀委員に向いてない。

「ってヤベっ！ こうしちゃいられないだった」
「……？」

忘れてた。そういえば俺は、購買にパンを買いに行く所だったんだ。このままだと残り物のあんパンだけになってしまう。

「悪い静流。ちょっと今から購買行かなきゃいけないんだ」
「そうか……それは残念だ」

しょんぼりする静流。それで俺は察した。さっきからちょっかい

を出してくるのも、多分そついう理由からだ。
なので、俺は一つ提案してみた。

「じゃあお昼一緒に食べるか？　ちょっと待っててくれればすぐ戻ってくるぞ」

「……」

もじもじしながら赤面。どうやら凶星のようです。

「それじゃあ、俺は戦場に行ってくる」

「わかった」

俺はそれだけ言っ、止めていた足を早足（走らない程度で）を購買に向ける。

すると背後から「コタロー」と呼ぶ声が聞こえたので、振り返る。

「がんばれ」

ぴっ、と静流が親指を立ててそつ言った。

「おう、がんばるぜ」

俺もそれに見習って、戦場突っ込む傭兵のように親指を立てて返事をした。

10月6日——昼時とフーキン（後書き）

やっと6日。ちょっと長めの文。そして静流も登場。ここまで長かった…

ここ原作軸なので、話があまりにもおかしくはなっていない…と
いいな。

10月6日——パンをめぐって

「うわぁ…混んでるな」

ここ、食堂に設置されている購買。そこにあるパンの入ったワゴン^{ハンター}は、昼食を少しでも充実した物にしようと企む狩人達の殺伐とした雰囲気^{ハンター}に包まれている。勿論、俺も今からそこに飛びこもうとする一人の狩人だ。

「あら、貴方も来たの？ この血みどろの争いが起こる戦場に」

人波から少し外れた柱に背中を預けて、腕を組みながら「感心したわ」と上から目線で話しかけてくる彼女は、幾多の戦いを潜り抜け、全ての任務を全うし帰還した、（自称）完全無敵凄腕のスパイ

——朱鷺戸沙耶である。

「ああ。そういう沙耶こそ珍しいな」

「まあね。体が鈍ってるから、ちよつと刺激が欲しくなったのよ」
「なるほどね」

何故刺激が欲しいのかはともかく、ここでパンの取り合いをすれば、鈍った体には確かにいい薬だろう。それくらいの争奪戦が、ここにはある。

「で、瑚太郎君。私と勝負しない？」

「しない」

「ルールは簡単よ。ここに突っ込んで、パンを取る。そして点数が高かった方の勝ち。点数換算は新作に近づくにつれて上、あんぱんに近づくほど下よ……」

さて……時間が押してるし、手堅くメロンパン辺りでいいか。惣菜パンが食べたいところだが、ここは贅沢を言っている場合じゃないな。

「って、え、しないの!？」

「反応遅い！」

背後から沙耶が数テンポ遅れて反応してきたので、つかさず突っ込む。こういう天然な所もあるのが、一緒にいて結構面白い。

って言うても、今はそう楽しんでる場合でもない。

「あなた、ここに戦いに来たんでしょ？　なのに、勝負しないの？　なぜ？　ホワイ！？」

「いや、さつさと買って食べたいからさ。約束してるんだよ」

顔を赤くしながら、ぷいと横を向いてしまう沙耶。どうやら今の発言で気分を損ねたようだ。ちよつと珍しい反応なので、可愛げがある。

「じゃあもう勝手にその子といちゃいちゃしてればいいじゃない！
もういちやいちゃしすぎてべたべたになつて接着剤使つたみたい
にくつついちゃえばいのよ！ そんなのを羨ましがつてる私を笑い
なさい！ あーっはっはっはって！」

しまった……沙耶が自虐モードに入ってしまった。

沙耶はどうも機嫌が悪くなると、どうも自分で言ってて悲しくならないのか？　と思う事を連発して言うようになる。これを俺と小鸟は、通称『自虐モード』と呼んでいる。こうなってしまうと、止

めるのは俺の力だけでは難しい。

だからといって、このまま放置していくわけにもいかないし、さ
てどうしたものか。

「と、とりあえず落ち着……」

「あーさぞかし私より可愛い後輩なんでしょうね！ もう二人で綿
飴くらいベッタベタになってればいいじゃない！ ベッタベタし
ぎてベタバタラブラブになればいいのよなっちゃんないさいよ！」
「……」

何を言ってるかさっぱりだ。勢いだけはあるが。
やはり、俺には止められないのか……

「どうした。コタロー」

「うわっ！」

突然後ろから声を掛けられると同時に、ブレザーの裾が引かれた。
振り返ると、ちょこんと背の小さいツインテールが立っていた。俺
が遅いので、ここまで来てくれたようだ。

「悪い。待たせておいて」

「だいじょーぶだ」

右手を上げて笑顔で言ってくれてるので、怒ってはいないようだ。
その後輩の優しさに、ちよっとほっとする。

そして俺への返答をした後、沙耶を見ての感想が一言漏れた。

「これはどうなってるんだ……」

「ごもつともな反応です。」

「一応俺の先輩なんだが。ちょっとこういう事があってな……」

簡潔にこうなった原因を話す。正直何でそうなったんだ、と思われても不思議ではない所なのだが、静流はふむふむ…とでも言っているような感じで聞いていた。

そして、聞き終わった後のコメントはこちら。

「じゃあ、私も一緒にやろう」

「え？」

あまりの変化球すぎるコメントに、思わず聞き返してしまう。だが聞き返した時には、既に静流は沙耶の元に向かっていた。

「勝負しよう」

わめいている沙耶に向けて、右手を上げて宣戦布告。

でも、散々話しかけて反応しなかったのだから、その程度で沙耶の機嫌が直るとは思え……

「ええ、いいわよ。ルールは簡単、パンを取って……」

さっきまで騒いでいたのが嘘のようだった！

「ってマジかよっ！」

「何ようるさいわね。少し黙っててくれる？」

いや、さっきまで暴走したように

「静流……お前凄いのよ」

「……？」

そう言うと、首をかしげて何が？ という反応をしてきた。静流のポテンシャルはやはり、底知れない物だった。

「いや、分からないならいいよ」

「そうか」

……何だ？ 俺の言葉じゃ反応しなかったのに、静流ので反応した……何だろう、初対面の後輩の言葉が、俺の言葉よりも耳に入るのは、どうにも腑に落ちない。長年付き合ってるのに。沙耶の扱い方すら知らないってのはどうなんだろうか。
それとも、俺は沙耶に……

「いやいや。それはないだろ……多分」

なんて考え事をしているうちに、機嫌を取り戻した沙耶が、高いテンションの声で宣言していた。

「それじゃ始めるわよ……。バトルスタート！」

「おー」

で見れば、静流と一緒に人波に突っ込んでいた。

しまった……！ 変な事考えてたせいで出遅れた！！

このままでは、俺の昼飯が悲しいあんぱんだけになってしまう。それだけは何としても避けたい。

「やっべっ！」

さっきまで考えていた事などはすぐに忘れて、俺は今日の前に直

面する緊急事態を回避するために、人波の中に威勢よく突っ込んでいった。

10月6日——パンをめぐって（後書き）

この小説書き始めてから、ずっと書く書くと思っていた所。

……でも上手く書けてない気がする。書きたいと思ってた所ほど上手く書けないというのは、どっというジレンマか。

10月7日——幻のパン

「あら、随分遅かったわね」

「かえってきたな……」

……返答する体力すら残っていないにもかかわらず、眼帯の少女は無表情で席についており、完全無敵のスパイは腕を組んで柱に寄っかかっていた。

「何でそんな早いんだよ……」

あの二人は……化け物すぎる。たかがパン競争と侮っていた俺がいけなかったのだ。

目に止まらない俊敏さ。人の隙間という隙間を潜る反射神経。そしてなおかつ、狙った獲物を確実にしとめる正確さと状況判断。まさに狩人^{ハンター}として呼ぶに相応しい能力。たかだかパンの購入……それだけの事だったのだが、想像を絶する戦いがそこにはあった。俺だって本気を出せばついていけるだろうが、さすがに今はそういうわけにもいかない。

「じゃあ得点の集計に入りましょう。じゃあまず私からね」

沙耶がテーブルの上に持っていたパンを並べる。数は3つで、焼きそばパン、メロンパン、メンチカツバーガー。どれも一般的だが、それなりの人気を誇る不動の三品。特にメンチカツはカツサンドにはないお手頃価格という庶民的な理由から、根強いファンも多数いると聞く。

「私はこの三つよ。合計でえーと……11点ね」

「おお」

成程。静流が關心しているのだが、俺には点数基準が全く分からない。どのパンが何点なのか俺にはさっぱりである。まあ大方、メンチカツが高得点なのは分かる。

「じゃあ次は瑚太郎君」

「あいよ」

そういえばパンを手取るのに必死で、どんなパンを手に入れたか意識してなかった。だが、あれだけ必死に手に入れたパンだ。根拠はないが、絶対の自信が、俺にはあった。

「これが俺の成果だ！」

俺は少しうきうきとした気分で、右手に持っているパン二つを、自信満々でテーブルの上に置く。

悪いが、俺の勝ちは頂いた。何せ、掴んできたパンは今日発売の新作。それも二個だ！新作のパンは勿論話題性抜群であり、という事は売りきれのりも早い。となれば、高得点間違いなし。

「すつごーい！ さすがね！」

「おおー」

という反応の二人が容易に想像できる。それくらいに、新作パンというのは価値が高いのだ。

「……」

だが、一向にそんな声は聞こえない。むしろ冷たくびみよーな目

線が、沈黙と共に俺に向かって放射されているようだ。

「あー成程ね……よく分かったわ」

「コタロー。これ、ある意味ですごい」

「え……？」

少し焦りを感じつつ、テーブルに置いた自分のパンを見る。そこに堂々と置かれているパンは、両方とも同じ種類のものだった。茶色い円形の生地に、真ん中には伝統的トレードマークの黒胡麻が散りばめられている。

そう、これはどこからどうみても、紛れもない……

「えーと、あんぱん二個……よ、ね？」

「のおオオオおおオオオ！！」

「コタロー。やってしまったな……」

俺の手に握られていたのは、売れ残るパンランキングでは不動の一位を誇るあんぱんだっだ！

「……二点ね、これ」

「ウソだろおおおお！！　だってこれ、新作のパンの所に置いてあったぞ！」

「確かに新作は新作ね。でも、超濃厚新触感あんぱん　ってなってる。どこからどう見てもあんぱんよ」

「ぐっ……」

いつもと同じように言いくるめられ、それに反論出来ないまま納得してしまう自分がここにいた。そう、同じなのだ。勝負をする度、考察をする場合、いつもこうやって言いくるめられる。それが本当だとしても、嘘だとしても。常に沙耶は、俺の一段上に立っている。

行動を読まれ、思考も読まれ。いつもその繰り返し。勝てた事はほとんどない。

……とか思ってみるが、今はただ俺がやらかしたただけだ。

「それじゃあ最後に中津さん。見せてちょうだい」
「りょーかいした」

落胆しているうちに、いつのまにか静流の採点が始まっていた。静流がテーブルの下に隠していたパンを取り出し、ずらりと並べる。数は二つ。品名はツナマヨパンとさんまサンド。二つとも不動の人気を誇る……いや、待て？

「さんまサンド……？ なんじゃそりゃ？」
「知らないのか？」

こんな美味い食べ物、どこを探しても無いぜ——と続けて言っている気がする。

「さんまとパンって……。なあ沙耶、このパン知ってるか……って、え？」

「う、嘘でしょ……？ だって、そんな……まさか。ありえないわこんなこと……」

「え、えーと……沙耶さん？」

質問を振ろうとしたのだが、何故か一人でぶつぶつ言葉を発している沙耶。どうやら何かに驚いているらしく、見てはいけない政府の重要機密でも発見してしまったかのように、目を丸めている。

「ま、まさか……幻のさんまサンドを手に入れる子がいるなんて……しかも、それが後輩？ まさか、信じられない……！」

「ま、幻……だと？」

「そうよ。そのあまりの希少さ故に店頭に並ぶのはごくごく珍しく、購買の店員が気まぐれで並べると言われているわ。そのせいで目撃例はどれも曖昧。さらにあまりに独特すぎると言われるその味が拍車をかけて、幻のパンと呼ばれているわ」

おお……確かに、それは幻のパンと呼ばれるのに相応しい実力を物語っていた。そんなパンが今日見つかったというのなら、沙耶がここまで驚きを隠せないのも無理はない。

「で、何で静流がその伝説のパンを？」

「おばちゃんに頼むと売ってくれる。仲がいい」

「そういうことか……」

成程。購買のおばちゃんと親しい静流は、お気に入りのパンを横流ししてもらってるというわけか。確かにそれならば、幻のパンと呼ばれてもおかしくはないはずだ。まあ、さんまサンドなんてのが置いてあっても、正直あまり売れる気はしないが……

「で、点数はどうなるんだ？」

「じゅ……１４点。私より上よ……」

「おー。じゃあ私の勝ちだ」

これくらいの半分お遊びな勝負に値するくらいの、程良い喜びを露にしている第一学年の静流。それに対して、重要な試合で敗北し、魂が抜けたみたいになっている第三学年の沙耶。たかだかパン取り競争にここまで感情移入しているのは、色々な意味で凄いなと感じてしまう。

そして気付けば、時刻は午後の授業開始の予鈴まで後５分という所までですんでいた。

「コタロー時間が無い。早く食べよう」

「そうだな」

「負けた……絶対に勝てると思ってたのに……負けた……」

酷くショックを受けている沙耶を慰めつつ、俺達は時計の針に急かされるようにパンを口の中に詰め込んだ。

10月7日——幻のパン（後書き）

とりあえず、これで一場面終了です。

そろそろ他のキャラも出していききたいですからね……

10月6日 偶然はよくあること

「風が出てきたな」

放課後。いくつかある帰宅ルートの内、街の中心部を進む遠回りのルートを歩いていた。

そしてどうも、今日は風が強い。歩いているOLが、スカートのはしを慌てて押さえているのが印象的。

森に囲まれた風祭は、たまに空から落ちてくる風にかき乱される。酷い時には、ちょっとした台風のレベルの風が吹いたりもするのだ。今日は丁度、そんな災難な日のような。

「……おつと、こりゃ」

そんな事を思っていたら、ビルの間を風が思いつきり抜けてきた。立ってられないほど強くはないが、体が押される感じがある。

建築途中のビルを覆うシートが一部はがれ、不安になる音をたててはためく。

そんな時、誰かが叫んだ。悲鳴だ。それも、視界内にいるさっきのOL。その人は上を見て叫んでいた。

それで、俺も反射的に見た。ビルの高層から、何かが落ちてきているのを。

数は複数。そう気付いた時には、一つが俺の数メートル先の地面にぶち当たる。映画ではよく聞くが、現実では聞き慣れない音を立てて、それは碎けた。

左手の前に、手をかざす。直後、手の平に小さな痛みを感じる。小石のようなものが、高速で命中したらしい。足元に転がったそれは、植木鉢の破片だった。それは先ほどの、高層からの落下物。地面には土が飛散していた。

また強い風が吹く。それに煽られた植木鉢が、さらに立て続けに落下してくる。その数は七つ。その内その内二つは、人間直撃コース。その内の一つは、自分の脳天直撃コース。

「……」

先に落下した二つの鉢が、地面に落下する。とっさのことで、体が固まって動けない。落ち着いて体を操れば避けられるはずだ。でも、その落ち着く時間なんて、今はない。

体と意識に、輝く液体を注ぐイメージを作る。機械に油を一滴だけ、少量さすように。だが、今はそれでも充分すぎる。それだけで俺の心と身体は、今とは比べ物にならないくらいに変革するのだ。そうすれば、もう後戻りは出来ない。

本当はやりたくない。

絶対に使いたくない。

……でも、やむを得ないのだ。

「だから……」

そう、意気込んだ瞬間だった。

「瑚太郎！ 駄目っ！！」

「ぐっ！」

突然背中に強い衝撃と、叫ぶような高い声が同時に衝突する。集中が途切れ、注ごうとした一滴は的外し身体の変革は失敗した。俺は誰かに突き飛ばされ、体は体制を崩していた。

倒れこむのとほぼ同時。真横で植物鉢が四散していた。

「間に合ええええつ!!」

俺の横を駆け抜ける誰かが、そう必死の声で叫んだ。

三発の乾いた銃声と、植木鉢が割れる破壊音。土が宙で拡散し、落下先に立っていた小学生に少し降りかかる。もし少しでも遅かったら、土の代わりに植木鉢が落下していただろう。

「ふう……なんとか間に合ったわね。君、大丈夫？」

頭上を見上げて硬直していた小学生に、俺を突き倒した張本人が優しく声をかける。小学生はまともに反応も出来ずに、棒立ちだ。俺は体を起こして、二人の元に駆け寄った。

「とりあえず離れよう」

「ええ。確かに安全が最優先だわ」

棒立ちの少年を抱え、危険域の外に抜けた。

「+?+?+?+?」

「あ、ありがとうございます……?」

「いやいや」

「いやいやって……。まあ、これから気をつけるのよ小学生」

いまいち理解の追いついていない小学生を残し、いそいでその場を離れる。誰かが通報でもしたのか、パトカーがサイレンを鳴らして入れ違いにやってきた。

「事情訊かれるのも面倒だし、早急に退散と行きましょ」

「だな。さつさとドロンと消えとこっ」

面倒事にならないよう、注意を払って二人で路地裏に逃げ込んだ。

しばらく無言で歩く。もう現場からはだいぶ離れたはずだが、うちの制服は目立つ。要心にこしたことはない。

「沙耶、サンキューな」

もう大丈夫だろうと判断し、隣を歩く彼女にひとまず礼を言う。

「べ、別に瑚太郎君のためじゃないわよ。あの子供を助けるついでよ、ついで」

突然そんな事を言われて驚いたのか、沙耶は顔を赤らめてそっぽを向いてしまう。もしかして、恥ずかしがってるのか……？
ちよつと苦笑しつつも、スルーしておく。

「それにしても、タイミングよくあそこにいたな。おかげで命拾いしたけど」

「たまたまよ。たまたまあそこに居合わせていただけよ。別に心配だったから尾行してたとか、そういうのは一切ない、ただのたまたまよ」

「……左様ですか」

……まあ、深くは詮索しないでおこう。

「で、さっきから思ってたんだけど……こっ、こんなに長かったかしらっ。」

ふと沙耶がそう言うが、俺も丁度微妙な違和感を感じていた所だった。

確かに、この通りの長さが明らかに長い。見覚えのない道ってわけじゃないので、なんとなく感覚として分かる。

「……なあ沙耶。俺達もしかして、とんでもない所に迷い込んでるんじゃない？」

「んなわけないわよ。だって一本道よ？ ストレートロードよ？」

「だよなあ……お、あそこの電信柱。住所とか書いてあるんじゃない？」

「そうね。確認しよう」

二人で電信柱をじーっと観察する。目的の物はすぐに見つかった。

「……竜里町」

二人同時にそう、呆然と呟いてしまう。

普段だったなら、全然こない辺りの地名だった。

「迷った……な」

「え、マジ？ マジなのこれ？ 私達何でこんな所に？ ホワイ？」

「ホントわけわからんな……」

本当にわけがわからなかった。ただまっすぐ歩いていたハズなのに……

「それにさ……人もあまりにいなさすぎる。いくら裏通りだからって、一人くらいはいるもんだろ？」

「確かにそうね。ゴーストタウンじゃあるまいし。でも、それはた

だの偶然って事もありえるわ。瑚太郎君、とりあえず適等に歩いて
みましょ」

「だな」

とりあえず二人で適等に歩いてみる。まっすぐだけではなく、角
も曲がってみた。

……だが、一向に人は見えない。気配すらも感じない。音も何も
聞こえない、無音の世界。どこか異質な……そんな不安が胸に込み
上げてきた。

「どおお!？」

突然右腕を沙耶に引っ張られる。あまりに急だったため、変な声
がつい出てしまう。

「いいから静かに！ ほら、大人しくこっち来て!」

そう焦り口調で言って、沙耶は俺の事を半ば無理やり茂みの奥に
引きこんだ。俺は従うがままにそこに隠れる。すると、この通りに
入ってから初めてのだろう。人に遭遇した。

(……何者?)

(さあ? ああいうのなんて言うのかしら)

(多分……。魔法使いなんか来てるやつってこれか? 現実で初
めてみた)

フードを目深にかぶっていて、男か女かも分からない不審人物に
遭遇した。多分、これは……ローブつつの? ファンタジックな
世界の魔法使いがよく着てるアレである。ゲームやらでは何度もお
目にかかった事はあるが、現実世界ではそうそう見る事はない。

（収穫祭のコスか何かか？）

（だとしても、あの気配は明らかにおかしいわ……。異質よ。それに、こっちを見ている……）

確かにその人間は、常人とは違う不気味なオーラのような物を漂わせていた。隠れて見えないハズの俺達をじっと見つめ、ただ立ち止まっている。微動だにせず、ずっと。

……これはマズイ！

「沙耶、走れ！」

「分かったわ！」

直感的にいやなものを感じた。きっと、沙耶も同じくそう感じ取ったのだろう。走り出すタイミングは台本があるかのようにぴったりだった。

10月6日 偶然はよくあること（後書き）

若干オリジナル。原作と微妙に変えてたり。

最後の切り方はこれでよかったのだろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1901v/>

Rewrite † song †

2011年12月5日20時13分発行